愛知県埋蔵文化財センター調査報告書　第176集

柿下遺跡（かきしたいせき）

2012

公益財団法人　愛知県教育・スポーツ振興財団

愛知県埋蔵文化財センター

柿下遺跡遠景

柿下遺跡の立地する新城市川上地区から東方の大宮地区を望む。左手にある雁峰山系からのびる丘陵や段丘上を中心に、多数の遺跡が展開する一帯である。古墳時代初頭には石座神社遺跡の集落が地域の拠点となっていたと考えられ、そこから南へのびる段上山には古墳群（段上山古墳群）がある。茶臼山付近では、横穴式石室の古墳（茶臼山古墳１～３号墳）、松尾神社付近では古代瓦が出土するなど、古墳時代後期以降の発展がみられる。　鎌倉・室町時代は、一帯は荘園（設楽荘・富永保）となっていた。現在ある神社や地名からその中心的な場所であったと考えられる。柿下遺跡では、荘園の時代にいとなまれた集落の遺構や遺物が検出され、平安時代末期に山麓から谷奥へと開発が進んだことがあきらかとなった。

柿下遺跡

柿下遺跡からみた茶臼山

上の写真の解説

柿下遺跡の発掘調査では、平安時代末期に始まる山麓集落の遺構・遺物が検出された。開拓当初は、斜面の小さな平場に竪穴状遺構を中心とした施設が散らばるように点在していたが、鎌倉時代になると、平場の造成規模が大きくなり、拠点的な平場とその周辺の小平場群という関係に変化していく。

上の写真は砂防のある沢をはさんで右に 08A 区、左に 08Bb 区の全景。08Bb 区の平場が拠点的であり、掘立柱建物が配置される。一方、08A 区では戦国時代から江戸時代の遺構・遺物が検出されており、時代が新しくなるにつれて居住地が山麓下方へ移動したことがわかる。

下の写真は 08Ba 区を北側からみた全景で、上の写真の 08Bb 区左方に位置する。手前の竪穴状遺構や、掘立柱建物が小平場のひとつに該当する。

また、写真遠景にみえる平地は、中世荘園の中心地と想定され、その縁辺に立地する柿下遺跡が、山麓の開発に関わっていた可能性が考えられる。

柿 下 遺 跡

序

愛知県新城市は、歴史的大事件となった長篠合戦のあったところとして、全国的に著名であります。しかしながら、歴史的大事件だけでなく、小さくて日常的ないとなみが、刻々と変化しつつ積み重なることで歴史となることは申すまでもありません。

埋蔵文化財とよばれる遺跡の数々は、歴史的大事件も含む、たくさんの日常的ないとなみが、地下に痕跡となって残されているものをいいます。愛知県埋蔵文化財センターがおこなう発掘調査は、こうした痕跡と解明し、広く成果とその証拠となるデータを公開することを目的としています。

新城市に所在する柿下遺跡では、第二東名高速道路建設に伴い、平成20年度に愛知県埋蔵文化財センターが発掘調査をおこないました。本書は、その発掘調査報告書であります。

柿下遺跡は、茶臼山のふもとにあって、主に平安時代から江戸時代までの集落遺跡が確認されました。特に、平安時代後期から鎌倉時代にかけての時期に、遺構や遺物の集中がみられました。人々が山間部への居住をすすめ、荘園を拡大していた時代を示しているものと思われます。

最後になりましたが、柿下遺跡の発掘調査から報告書の刊行にいたるまでに、地元である新城市川上地区の皆さんをはじめとする、関係者の多大なるご理解とご協力に感謝申し上げますとともに、本書が、地域の歴史を広く知らしめる礎となることを祈念いたします。

公益財団法人　愛知県教育・スポーツ振興財団
理事長　加藤高明

例　言

(1) 本書は、愛知県新城市に所在する柿下遺跡（県遺跡番号 760037、県埋文遺跡記号 3SKS）の発掘調査報告書である。

(2) 発掘調査は、中日本高速道路株式会社による第二東海自動車道建設に伴う事前調査で、愛知県教育委員会を通じた委託事業として財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター（現：公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター）が実施した。

(3) 発掘調査期間は、範囲確認調査が平成 19 年 5 ～ 6 月で、本調査が平成 20 年 12 月～平成 21 年 3 月である。

(4) 発掘調査面積は範囲確認調査が 24㎡、本調査が 2,400㎡である。

(5) 発掘調査は、範囲確認調査は宮腰健司（調査研究専門員、現：主任専門員）、岡久雅浩（調査研究主事、現：愛知県立岡崎西高等学校）が担当し、本調査は酒井俊彦（調査研究専門員）、永井邦仁（調査研究主任）が担当し、本調査については国際文化財株式会社の支援を受けた。また自然科学分析は株式会社パレオ・ラボの協力を得た。

(6) 発掘調査から報告書刊行までに、以下の諸機関・個人のご協力・ご指導をいただいた。記して感謝する。中日本高速道路株式会社豊川工事事務所・愛知県教育委員会生涯学習課文化財保護室・愛知県埋蔵文化財調査センター・新城市教育委員会・新城市高規格道路課・新城市川上地区・都築暢也・北村和宏・長田友也・今泉欽吾・岩山欣一・額縁茂

(7) 本書作成のための整理作業は愛知県埋蔵文化財センターが実施し、株式会社ナカシャクリエイテブ・写真工房遊の協力を得た。

(8) 整理作業期間は平成 22 年 8 月～平成 23 年 3 月である。

(9) 本書の執筆は永井邦仁・鬼頭剛（調査研究主任）・長田友也（南山大学非常勤講師）が行った。なお編集は永井が行い、株式会社文化財サービスの協力を得た。

(10) 本書で提示した座標数値は、国土交通省で定められた平面直角座標第Ⅶ系に準拠する。
海抜表記は東京湾平均海面（T.P.）の数値である。

(11) 写真や図面などの調査記録は愛知県埋蔵文化財センターで保管している。
〒 498-0017 愛知県弥富市前ヶ須町野方 802-24（TEL0567-67-4161）

(12) 出土遺物は愛知県埋蔵文化財調査センターで保管している。
〒 498-0017 愛知県弥富市弥富市前ヶ須町野方 802-24（TEL0567-67-4164）

目　次

第１章　調査の概要
　第１節　調査に至る経緯 …… 1
　第２節　遺跡の立地する地理的環境 …… 5
　第３節　遺跡をとりまく歴史的環境 …… 6
第２章　発掘された遺構
　第１節　調査区と調査前の状況 …… 9
　第２節　柿下遺跡の基本層序 …… 10
　第３節　遺構各説 …… 12
第３章　出土した遺物
　第１節　概要 …… 21
　第２節　08A 区 …… 22
　第３節　08Ba 区 …… 25
　第４節　08Bb 区 …… 28
第４章　自然科学分析
　第１節　新城市中央部、柿下遺跡における地下層序 …… 29
第５章　総括
　第１節　柿下遺跡における中世の開発 …… 35
　第２節　愛知県新城市柿下遺跡周辺出土の類石棒について …… 41
遺構基本平面図 …… 45
写真図版 …… 49

図版目次

図 1　新城市の位置図 …… 1
図 2　遺跡位置図 …… 1
図 3　柿下遺跡調査前地形図 …… 1
図 4　第二東名高速道路関連遺跡位置図　2
図 5　試掘トレンチ配置図…… 3
図 6　柿下遺跡の調査工程…… 4
図 7　新城市の地形分類図…… 5
図 8　周辺の遺跡分布 …… 6
図 9　茶臼山古墳群・
　城山経塚出土遺物実測図 …… 7
図 10　調査区設定図 …… 9
図 11　調査前状況図 …… 9
図 12　基本土層断面図（08Ba 区） …… 10
図 13　基本土層断面図（08A 区） …… 11
図 14　08A 区 066SK・067SK 遺構図 …… 12
図 15　08Ba 区掘立柱建物遺構図 …… 13
図 16　08Ba 区 003SX・006SX 遺構図 …… 15
図 17　08Ba 区 086SX・096SX 遺構図 …… 16
図 18　08Bb 区 B2 平場建物遺構図 …… 17
図 19　08Bb 区 006SX（139SX）遺構図 …… 19
図 20　08Bb 区 095SX 遺構図 …… 20
図 21　柿下遺跡出土遺物組成図 …… 21
図 22　08A 区遺物実測図 (1) …… 22
図 23　08A 区遺物実測図 (2) …… 23
図 24　08Ba 区遺物実測図 (1) …… 24
図 25　08Ba 区遺物実測図 (2) …… 25
図 26　08Bb 区遺物実測図 (1) …… 26
図 27　08Bb 区遺物実測図 (2) …… 27
図 28　08Bb 区遺物実測図 (3) …… 28
図 29　柿下遺跡周辺等高線図 …… 29
図 30　地点 1 柱状図 …… 30
図 31　地点 2 柱状図 …… 31
図 32　柿下遺跡地質概念図…… 35
図 33　柿下遺跡の中・近世遺構群 …… 36
図 34　柿下遺跡周辺の中世遺跡 …… 37
図 35　柿下遺跡付近の地籍図 …… 39
図 36　石棒類の概念図 …… 41
図 37　柿下遺跡周辺出土の類石棒実測図　41
図 38　愛知県内における類石棒の類例…… 42
図 39　柿下遺跡基本遺構平面図割付図…… 45
図 40　柿下遺跡 B 区基本遺構平面図 (1) … 46
図 41　柿下遺跡 B 区基本遺構平面図 (2) … 47
図 42　柿下遺跡 A 区基本遺構平面図 …… 48

表目次

表 1　^{14}C リスト …… 32

写真図版目次

写真図版 1　遺構写真 08A 区 (1) …… 49
写真図版 2　遺構写真 08A 区 (2) …… 50
写真図版 3　遺構写真 08A 区 (3) …… 51
写真図版 4　遺構写真 08Ba 区 (1) …… 52
写真図版 5　遺構写真 08Ba 区 (2) …… 53
写真図版 6　遺構写真 08Ba 区 (3) …… 54
写真図版 7　遺構写真 08Ba 区 (4) …… 55
写真図版 8　遺構写真 08Ba 区 (5) …… 56
写真図版 9　遺物写真 08Bb 区 (1) …… 57
写真図版 10　遺物写真 08Bb 区 (2) …… 58
写真図版 11　遺物写真 08Bb 区 (3) …… 59
写真図版 12　遺物写真 08Bb 区 (4) …… 60
写真図版 13　遺物写真 08Bb 区 (5) …… 61
写真図版 14　遺物写真 (1)…… 62
写真図版 15　遺物写真 (2)…… 63
写真図版 16　遺物写真 (3)…… 64

第１章　調査の概要

第１節　調査に至る経緯

新城市の位置　新城市は愛知県の東部に位置し、東三河地域に含まれる人口 49,871 人（平成 22 年 10 月）の市である。平成 17 年 10 月に南設楽郡鳳来町および作手村と合併し、豊川中流域に沿った低地から山地までを含む 499㎢の市域となった。南側で豊川市・豊橋市と北側では東栄町・設楽町に接し、東側は静岡県浜松市と接している。

図１　新城市の位置図

遺跡の位置　柿下遺跡は東経 137 度 30 分 49 秒、北緯 34 度 55 分 28 秒を中心に広がる遺跡である。遺跡所在地は新城市川上地区に含まれる。同地区は新城市の市街地から北東へ約 4km に位置し、豊川右岸から北西方向に向かって台地そして雁峰山麓へと高位になる地区である。比較的耕作地が多い農村地帯であるが、区画整理が進められ小さな区画の田畑は失われつつあり、また宅地化も進行している。

図２　遺跡位置図

図３　柿下遺跡調査前地形図

第二東名高速道路の計画　新城市内では、中日本高速道路株式会社（旧日本道路公団）を事業主体とする第二東名高速道路（新東名高速道路、法定路線名は第二東海自動車道）が、西方の雁峰山系から豊川を渡って東方の弓張山系に抜けるルートで建設されることとなった。そしてそのルート上に位置する遺跡の有無について照会がなされ、愛知県教育委員会と新城市教育委員会によって有無確認調査が実施された。それによって柿下遺跡を始めとする遺跡の所在が示され、対応について協議が行われた。結果、遺跡については記録保存を実施することとし、平成19年度に範囲確認のための試掘調査が、愛知県教育委員会を通じて財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター（当時、現公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター、以下県埋文センターと略）に委託された。

遺跡発掘調査の実施　県埋文センターでは、平成19年度に川上地区で柿下遺跡、大宮地区で石座神社遺跡・設楽原決戦場跡（加原遺跡）、須長地区で石岸遺跡、八束穂地区でモリ下遺跡の範囲確認調査を実施し、遺跡範囲などの報告を行った。それを受けて平成20年度に柿下遺跡・吉竹遺跡・石座神社遺跡・石岸遺跡・モリ下遺跡で本調査が実施されることとなった。

柿下遺跡は、遺跡地の樹木伐採作業が完了した平成20年11月に発掘調査を開始した。その後調査は順調に進行し平成21年2月7日には地元説明会を実施し、約50名の見学者の来訪があった。そして同年3月に調査を終了した。

平成21年度以降は欠下城跡・吉竹遺跡・石座神社遺跡・須長10号墳・モリ下遺跡・中山砦跡で本調査が実施され、各時代にわたる多数の遺構・遺物を検出することができた。特に石座神社遺跡では、弥生時代末～古墳時代初頭の拠点的な集落を検出したほか鏡片が出土も確認され、地域史解明の重要な資料を提供している。

これらの遺跡については、調査時点で地元説明会を開催し、注目される事実について県埋文センターホームページ上で紹介を行うなどして各種速報をおこなってきた。そして平成22年度には、柿下遺跡の調査成果を総括するための整理作業を実施し、報告書を刊行するに至った。

図4　第二東名高速道路関連遺跡位置図

調査体制　県埋文センターでは、発掘調査実施にあたって民間業者の支援を受けている。柿下遺跡の発掘調査では国際文化財株式会社の支援を受けた。発掘調査チームの編成は以下の通りである。

調査研究専門員　酒井俊彦、調査研究主任　永井邦仁（以上、県埋文センター）

現場代理人　定水育久、調査補助員　石松直、測量士　星野賢一・坂口幸久、

発掘作業員　　中野一徹ほか（以上、国際文化財株式会社）

整理体制　遺物整理作業にあたっては、株式会社ナカシャクリエイテブの支援を受けた。遺物の接合・復元・実測・トレース・収納作業を愛知県名古屋市内に所在する同社施設内で実施した。遺物整理作業チーム編成は以下の通りである。

調査研究専門員　鈴木正貴、調査研究主任　永井邦仁（以上、県埋文センター）

遺物整理作業担当　日紫喜勝重（以上、株式会社ナカシャクリエイテブ）

調査方法　発掘調査は、調査対象地に調査区を設定した。調査対象地を断ち割るようにして沢と砂防施設があるためそこから東側を 08A 区、西側を 08B 区とした。そして 08B 区は排土置き場を確保するため西側を Ba 区、南側を Bb 区とした。表土掘削は重機によって行い、遺構面および遺物包含層の上面までを掘削し、その後発掘作業員による包含層掘削と遺構検出を進めた。遺構検出は永井と石松が担当した。同時に国土座標系に基づく調査グリッドを設定し、遺構・遺物の記録に備えた。遺構はその検出状況を写真撮影した後に土層を確認しながら掘削し、記録を採った。

範囲確認調査　先述のように柿下遺跡では、県埋文センターが範囲確認調査を実施しているが、その前後２回にわたって愛知県教育委員会による試掘調査も行われている。調査地点は図５の通りである。初回調査時に遺跡の北部で山茶碗片が地表面で採集されたため、２回目の試掘が行われ、遺物の出土などがあって調査対象地に含まれた。県埋文センターの範囲確認調査は初回試掘成果に基づいたため遺跡南部にトレンチが集中している。

当該遺跡では、遺構・遺物の分布がいくつかの小地点に分散する傾向があり、試掘調査の手法も工夫が必要である。この点については、総括（第５章）で詳述する。

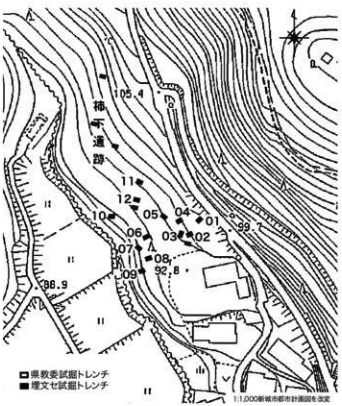


図５　試掘トレンチ配置図

調査の経過　発掘調査は 08Bb 区→ 08A 区→ 08Ba 区の順に着手した。調査期間は、08A 区が平成 20 年 12 月～平成 21 年 2 月、08Ba 区が平成 21 年 2 月～ 3 月、08Bb 区が平成 20 年 12 月～平成 21 年 2 月である。08Bb 区では表土除去時に遺物が多数認められたため試掘時のデータから目標としていた土層よりやや上位で遺構検出作業へと移行した。しかしながら黒ボク層上面での検出作業は黒色土の中で見極めねばならず、誤認や見落としが生じやすくなる。そのため一旦遺構掘削まで進行した後に、調査区の一部で黒ボク層をある程度掘り下げた状態で再度検出をおこなった。そのため結果的には 08Bb 区の調査期間が最も長くなった。次いで開始した 08A 区でも 08Bb 区に似た状況であったが、こちらは調査区東半部で黒ボク層を除去しての再検出をおこなって遺構・遺物がないことを確認した。

検出した遺構は、ピットなどの小型のものであれば土層断面の観察をしながら半分を掘削し、適宜土層についても記録を行った。また、竪穴建物跡などの大型のものでは土層観察用のベルトを残しながら掘削し、底面の状況を把握するか、不明瞭な場合はベルトに沿ってサブトレンチを掘削し、下層の状況と比較しながら土層観察を行った。遺物は基本的に 5m グリッドと出土遺構を記録して採取した。

遺跡地元説明会は 08Bb 区で開催し、約 50 名の参加があった。その後 08Ba 区の調査をおこなったが、当該調査区では遺構・遺物の展開が比較的狭い範囲に止まっていたこともあって調査は 3 月中旬で完了することができた。

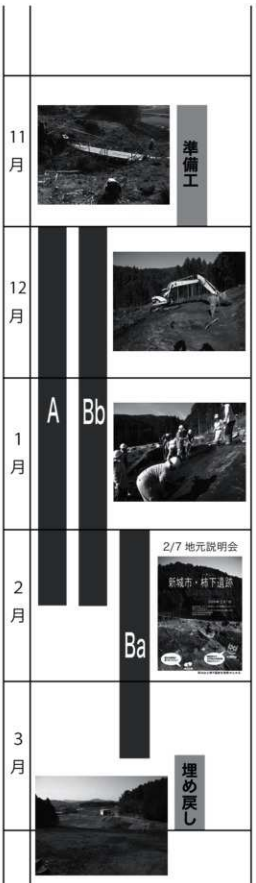


図6　柿下遺跡の調査工程

第２節　遺跡の立地する地理的環境

柿下遺跡は新城市中部に位置する。市域を貫流する豊川右岸には雁峰山系と呼ばれる標高500 ～ 600m の山地が東北～南西方向に連なり、その南側には豊川に向かって段丘が発達している。段丘は上・中・下位に区分されているが、最も広い面積を占めるのが中位段丘である。中位段丘面は南北に緩い傾斜をとりつつも概ね平坦であり、現在の新城市街地も中位段丘に立地する。そして段丘を切り込むように小河川（大宮川・連吾川など）が流れ深い谷を形成している。これらの段丘と谷が遺跡周辺の景観的特徴を醸し出しているといえよう。加えてこれらの小河川は、遺跡周辺の大宮・須長地区から南西地域では、一旦雁峰山系と直交する南東方向に流下した後、段丘地帯を抜ける間に少しずつ流れの方向を南方向へと変えていく。したがって段丘や丘陵端部の輪郭は曲線を描いている。柿下遺跡が立地するのはそうした雁峰山系裾から張り出した尾根筋の一つである茶臼山（標高 152.7m）の南西斜面である。この斜面は、基底となる花崗岩の岩盤が風化したものが堆積して形成されたものを基本とするが、より上位では岩盤そのものが露頭している箇所もある。柿下遺跡の場合、調査区外北東側はそのような地点である。

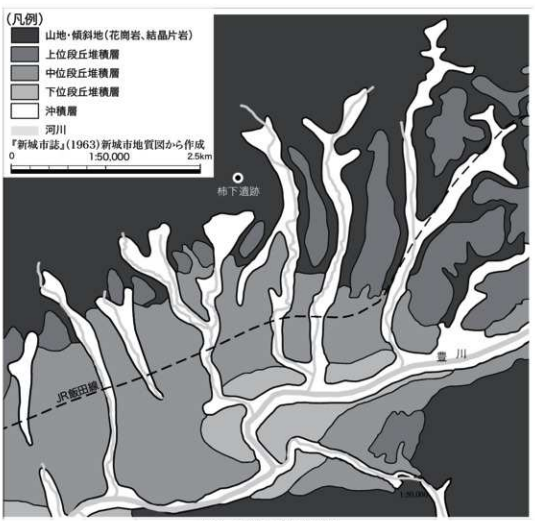


図７　新城市の地形分類

第３節　遺跡をとりまく歴史的環境

柿下遺跡のある茶臼山は、天正３（1575）年のいわゆる長篠・設楽原合戦時に織田信長が一時的に本陣を置いたところとして知られ（註１）、山頂には陣城の遺構があるという（高田1996）。山頂付近の字名は「城山」である。山頂には経塚（城山経塚）が確認されており、江戸時代末期（安政年間）に経筒と直刀が掘り出され、現在、新城市教育委員会で陶製経筒外容器が保管されている（図9-8）。おそらく平安時代後期～鎌倉時代には仏教信仰の聖地になっていたものと考えられ、ほぼ同時代となる柿下遺跡の性格にも大きく関わると考えられる。

山頂から南東へ下った斜面地には茶臼山古墳群がある。茶臼山１号墳は横穴式石室を有する

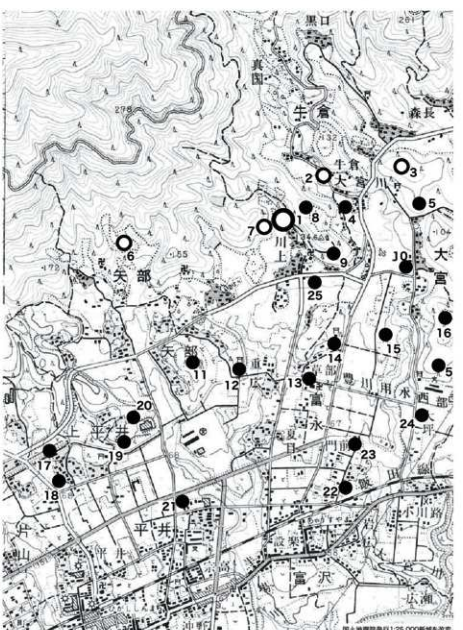


図８　周辺の遺跡分布

直径約 12m の円墳が残存し、同 2・3 号墳は既に滅失している。市教育委員会には茶臼山古墳出土遺物として須恵器杯蓋 6、杯身 6、提瓶 1、フラスコ瓶 1 が保管されている（図 9）。須恵器は 6 世紀末～ 7 世紀後半であり、どの石室から出土したものかは不明であるが、杯身はまとまっており一括出土したものであろう。柿下遺跡から南方にやや下った扇状地上では、遺跡としては認定されていないが古墳時代～平安時代の須恵器・灰釉陶器が散布する地点があり古墳との関連が注目される。さらに視野を広げると南方の松尾神社付近は茶臼山から延びる丘陵地端であるが、その南側にある神田遺跡では奈良時代とみられる布目瓦が出土し（渡辺・岩山 2009）、加えて東方のほ場整備地帯では複弁蓮華文軒丸瓦が採集されている（森田 2001）。このことから神田遺跡周辺に瓦葺き建物を想定でき、大宮川左岸に現在所在する式内社石座神社と並んで古代におけるこの地域の中枢であったと予察される。

柿下遺跡と谷を挟んだ西側の丘陵地には屋川遺跡がある。石器や布目瓦が採集されたといわれ（註 2）、特に丘陵頂部の小字が「寺山」であることから寺院との関わりがあるのかもしれない。ただし瓦が出土したといわれる丘陵端部は、1980 年代に削平され耕作地となっており、その裾部では地元の方によって土師器皿が採集されている（図 9-7）。また現在残る丘陵裾には白山社があったが平成 6 ～ 7 年頃に祭主が不在となったため解体されている。一方石器の所属時期は不明であるが、茶臼山東麓にある北下遺跡や吉竹遺跡で石器が出土していることから、ま

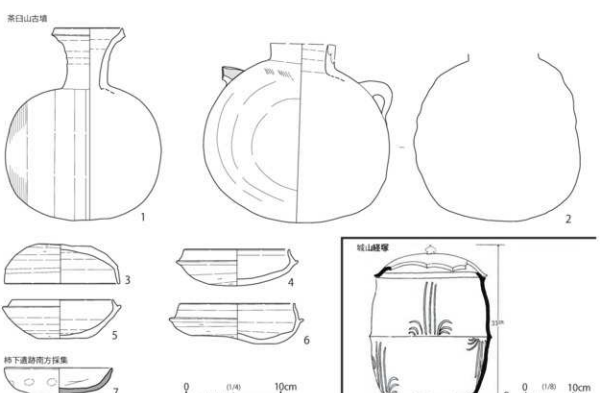


図 9　茶臼山古墳群・城山経塚出土遺物実測図

だよく知られていない縄文時代から弥生時代の遺跡が点在している可能性が考えられる。

次に文献史料にみる柿下遺跡周辺の状況について俯瞰しておく。まず、平安時代中期の延喜3（903）年宝飯（飫）郡から設楽郡が分割される。郡家への距離が遠かったことがその理由のようであるが、それだけ集落や人口の増加が進んだのであろう。その後、総括（第5章第1節）でもふれるが付近一帯が設楽荘となったとみられ、12世紀末の段階では京都・松尾社の支配を受けている。そして中世後半には富永保や富永荘という荘園名を知られているが、これは遺跡南方の現地名でもある。

これら荘園を在地で管理したであろう武士階級については、設楽氏の名が『保元物語』から登場するが、鎌倉時代、承久の乱を経て設楽氏は三河国守護となる足利氏の配下に組み込まれ、荘園も室町時代には将軍となった足利氏の御料所となっていく。

ところで、長篠合戦で著名な活躍をした鳥居強右衛門勝商とともに長篠城から脱出した武士の一人に鈴木金七という人物がおり、彼はその後帰農していたところを作手亀山城主であった松平忠明に仕えるようになったという。柿下遺跡周辺はその屋敷があったところという伝承がある。このように、荘園や武士にまつわる史料や伝承が、遺跡周辺で多数みることができるのも柿下遺跡の特徴でもある。

註1　『総見記』や『長篠日記』等による。ただし前者は江戸時代の軍記物、後者は天正6年に書かれたという奥書があるものの内容は『総見記』や『甲陽軍鑑』等と「類似が著しく近世中期以降の成立であることは明白」（太向1996）だとされる。また『長篠合戦絵図』（致道博物館蔵）という陣立図では「川上山」に信長本陣が描かれている。「川上山」は茶臼山の位置にあたる。

註2　付近在住の方からは丘陵削平時に瓦が出土したという話をうかがっている。

参考文献

小和田哲男監修・小林芳春著　2003　『徹底検証 長篠・設楽原の戦い』吉川弘文館

藤本正行　2003　『信長の戦争―『信長公記』に見る戦国軍事学―』講談社学術文庫1578　講談社

藤本正行　2010　『長篠の戦い　信長の勝因・勝頼の敗因』歴史新書y001　洋泉社

高田　徹　1996　「三河長篠城及び長篠合戦陣所群に関する検討」『中世城郭研究』第10号　中世城郭研究会

太向義明里1996　『長篠の合戦―虚像と実像のドキュメント―』山日ライブラリー　山梨日日新聞出版部

森田勝三　2001　「新城市大宮・塚田遺跡出土の古瓦」『伊勢湾考古』第15号　知多古文化研究会

渡辺敬一・岩山欣司　2009　『愛知県新城市　八剱遺跡・神田遺跡発掘調査報告書』新城市教育委員会

新城市　1980　『新城市誌』　新城市

第２章　発掘された遺構

第１節　調査区と調査前の状況

調査区の設定　発掘調査区は、範囲確認調査等によって確定した、発掘調査の必要な範囲に対して設定された。ただし遺跡範囲内のほぼ中央を、茶臼山から水を流下させるために作られた砂防施設が大きく断ち割っていた。したがって調査区はここで南北に分割されることとなり、南側を 08A 区、北側を 08B 区とした。さらに 08B 区は調査による排土が持ち出せないために半分ずつの工程となり、南半部を 08Bb 区、北半部を 08Ba 区とした。

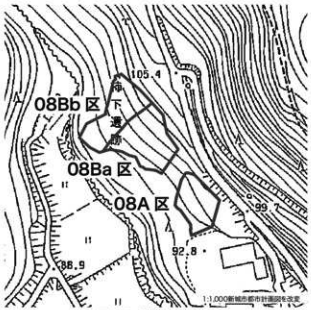


図 10　調査区設定図

調査前の状況　発掘調査時点における遺跡範囲は主に山林となっており、08A・B 区を設定した平場とその下方斜面には杉の植林がなされていた。両調査区を隔てる砂防施設は 1970 年代に造られたという。調査区内はそれぞれ２～４の小平場で構成されている（図 11）。中でも 08A 区の A1 と A2 の間、B 区の B2 と B3 の間が約 1m の段となっており、A1・A2 間では崩れた石垣が認められたことから、植林以前は耕作地として利用されていたことがうかがえた。このことから、遺構の残存状況もこれらの段に対応するものと予想し、重機掘削も段階を分けて実施した。

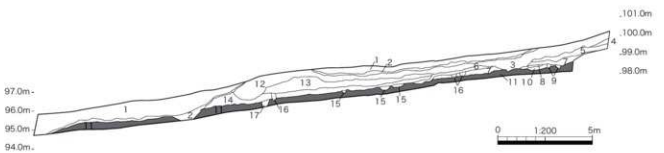
図 11　調査前状況図

A1 の石垣付近からは、戦国～江戸時代の土師器鍋片や土師器皿が比較的多く出土したが、明瞭な遺構は検出されなかった。A2 は概ね遺構面がみられることから、古くからの地形であったと考えられる。B2 は北半部で大きく張り出す形状であるが、層序を確認すると比較的新しい時期（20 世紀以降）に土盛りをしていたことが確認できた。したがってこれを除外すると、Bb 区内では B1 から B4 まで顕著な平場がなく、ごく最近まで全体が緩斜面であったと考えられる。これに対して、遺構面が検出できた B2 南半部と B3 が A2 と同様に古くからの平場地形であったと考えられ、このことから遺跡の中心を A2・B2・B3 に想定しての調査を進めていった。

第２節　柿下遺跡の基本層序

次に遺跡の基本土層について説明する。遺跡の地理的環境でも述べたように当該遺跡は茶臼山山麓に位置している。したがって山塊の一部である花崗岩とその風化によって生成した黄褐色粘土層が基盤となる（以下これを地山とよぶ）。ただしこの地山層は急傾斜で落ち込んでおり、08A 区東端付近で検出されたのみである。調査区の大半では砂質シルトが地山の上に厚く堆積している。このシルト層は黒色のいわゆる黒ボクとよばれる層と、砂礫や黄褐色粘土粒が混じる灰褐色の層が交互にみられる。後者は上方から流れ込んだものと考えられ、その下位にある黒ボク層との間に明瞭なラインを見出しうる。一方黒ボク層は上から下へ向かって徐々に黒色が薄くなりやがて灰褐色層へ至る。したがって境界は明瞭ではない。このことから、土砂崩れなどの瞬間的な自然堆積が発生した後に安定期間があって、その間に上部が土壌化（黒色化）し人為によって遺構が形成されたものと考えられる。

遺構検出は表土層直下で検出される黒ボク層の上面で行った。ただし B2 平場に関しては、その少し上位で遺物の出土をみたことからそこで第１遺構面とした。そこでは近世の遺物を含む遺構を検出することができ、掘削した。その後約 15cm 掘り下げた状態で再度検出を行ったところ竪穴状遺構や柱掘方の下部を再び確認し、遺構が想定より深くまで掘り込まれていることがわかった。



1　10YR 5/3　にぶい黄褐色　シルト（中粒砂、現代盛土、ゴミ多い）
2　10YR 4/4　褐色　シルト（中粒砂含み、木片・炭化物含む）
3　10YR 5/4　にぶい黄褐色　シルト（粘性、径5mm位の小石含む）
4　7.5YR 4/1　褐灰色　シルト（中粒砂含み、径3mm位の小石含む）
5　7.5YR 3/1　黒褐色　シルト（中粒砂含み、径3mm位の小石含む）
6　7.5YR 5/2　灰褐色　シルト（細粒砂含み、径2mm位の小石含む）
7　7.5YR 4/3　褐色　シルト（細粒砂含み、径2mm位の小石含む）
8　7.5YR 3/2　黒褐色　シルト（中粒砂含み、径3mm～5mm位の小石を多く含む）
9　7.5YR 3/3　暗褐色　シルト（中粒砂含み、径3mm～5mm位の小石を多く含む）
10　7.5YR 4/2　灰褐色　シルト（中粒砂含み、径3mm～5mm位の小石を多く含む）
11　5YR 3/1　黒褐色　シルト（細粒砂含み、径5mm位の小石を多く含む、径2cm～5cmの礫混じる）
12　10YR 5/6　黄褐色　シルト（細粒砂含む）
13　10YR 2/3　黒褐色　シルト（細粒砂含む）
14　7.5YR 4/4　褐色　シルト（中粒砂含み、径3mm位の角礫含む）
15　7.5YR 3/1　黒褐色　シルト（中粒砂含み、径3mm位の角礫含む）
16　7.5YR 4/2　灰褐色　シルト（中粒砂含み、径3mm位の角礫含む）
17　7.5YR 4/2　灰褐色　シルト（中粒砂含み、径3mm位の角礫含む）

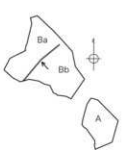
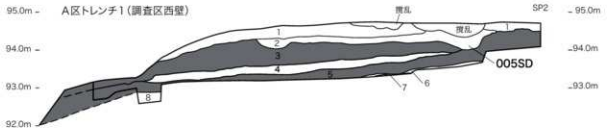
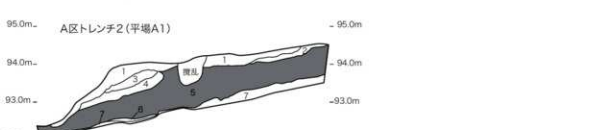


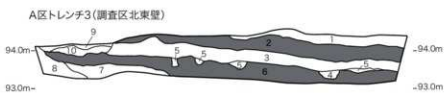
図 12　基本土層断面図（08Ba 区）



1　10YR 2/2 黒褐色　シルト（中粒砂含み、径2mm位の礫混じる）
2　7.5YR 3/2黒褐色　シルト（細粒砂含み、径2mm位の角礫混じる）
3　10YR 2/1 黒色　シルト（細粒砂含み、径2mm位の角礫混じる）
4　10YR 3/3 暗褐色　シルト（細粒砂含み、径2mm位の礫多く含む）に10YR4/3褐色シルト（粗砂含む）
5　10YR 2/2 黒褐色　シルト（粗粒砂含み、径1cm位の礫混じる）
6　10YR 2/2 黒褐色　シルト（粗粒砂含み、径1cm位の礫混じる）に10YR5/3にぶい黄褐色シルト（中粒砂含み、径2mm位の角礫多く含む）
7　10YR 2/1 黒色　シルト（粗粒砂含む）
8　7.5YR 3/2黒褐色　シルト（粗粒砂多く含み、径1cm位の礫混じる）



1　10YR 5/3 にぶい黄褐色シルト（細粒砂含む）
2　10YR 1.7/1　黒色　シルト（中粒砂含み、径2mm位の礫混じる）
3　10YR 3/3 暗褐色　シルト（細粒砂含み、径2mm位の小礫多く含む）
4　10YR 3/2 黒褐色　シルト（細粒砂含む）
5　10YR 2/1 黒色　シルト（細粒砂含み、径5mm位の礫混じる）
6　10YR 2/3 黒褐色　シルト（中粒砂含む）
7　10YR 3/1 黒褐色　シルト（細粒砂多く含み、径2mm位の角礫混じる）



1　10YR 5/3 にぶい黄褐色シルト（中粒砂含み、径2mm位の小礫を含む、表土）
2　7.5YR 2/1 黒色　シルト（細粒砂含む）
3　10YR 4/4 褐色　シルト（細粒砂含み、径5mm位の角礫混じる）
4　10YR 3/3 暗褐色　シルト（細粒砂含む）
5　10YR 3/4 暗褐色　シルト（細粒砂含み、径2mm位の角礫混じる）
6　10YR 3/4 暗褐色　シルト（中粒砂含み、径20cm位の角礫多く含む）
7　10YR 5/2 灰黄褐色　シルト（細粒砂含み、径20cm位の角礫混じる）
8　10YR 4/1 褐灰色　シルト（中粒砂含む）
9　10YR 3/2 黒褐色　シルト（中粒砂含む）
10　10YR 2/3 黒褐色　シルト（中粒砂含む）

1　10YR 3/3 暗褐色　シルト（細粒砂含む）
2　10YR 1.7/1　黒色シルト（中粒砂含み、径2cm位の礫混じる）
3　10YR 2/1 黒色 シルト（細粒砂含み、径5cm位の礫混じる）
4　10YR 3/2 黒褐色 シルト（細粒砂含む）+10YR5/3にぶい黄褐色シルト
5　10YR 3/2 黒褐色 シルト（中粒砂含み、径5mm位の小礫混じる）
6　10YR 5/2 灰黄褐色　シルト（中粒砂含む）
7　7.5YR 7/3にぶい橙色　シルト
8　10YR 3/4 暗褐色　シルト（細粒砂含み、径3mm位の角礫混じる）
9　10YR 5/3 にぶい黄褐色 シルト
10　10YR 5/2 灰黄褐色　シルト（細粒砂含む）031SD埋土

図 13　基本土層断面図（08A 区）

第３節　遺構各説

08A 区の概要　調査前にあった石垣を除去すると平場 A1 はほとんど残存せず、平場 A2 で大半の遺構が検出された。ピットや土坑が平場 A2 の北半部に比較的集中し、ピットは掘立柱建物を構成する。08A202SA から南側では明確な遺構は検出されなかった。そのため調査区南半部では黒ボク層も掘削して再度検出を試みたが、遺構・遺物ともに認められなかった。

08A201SB　平場 A2 に立地する、掘立柱建物の一部である。ピット状の土坑 011SK、013SK、018SK、020SK が L 字状に並ぶ。柱間間隔は 1.7 ～ 1.9m で、ピットの深さは平均して 30cm である。遺物なく時期は不明である。

08A202SA　平場 A2 に立地する掘立柱の柵である。ピット状の土坑 053SK、052SK、050SK、047SK、048SK で構成される。柱間間隔は 0.8 ～ 1.6m で、ピットの深さは平均して 10cm である。遺物はなく時期は不明である。

08A066SK・067SK　平場 A1 と A2 の間には 005SD があって、これによって平場 A2 が画されていることがわかる。005SD からは江戸時代以降の遺物が出土している。もともと存在した平場 A2 を拡幅する際に生じたものとも考えられる。その 005SD に重複して 066SK・067SK が位置する。005SD に先行する 033SD の下部から検出されているので、この中で最も先行する遺構を判断される。066SK は 067SK の上層部分にあたり、実質これらは１つの遺構とみなせる。形状は長軸 180cm、深さ 35cm のやや不整な円形である。遺物は 066SK 相当層位から土師器皿２点が出土した。時期は江戸時代と考えられる。

08Ba 区の概要　調査区の北半部が平場 B2 に相当し、その範囲で土坑・ピット・竪穴状遺構などが南北の帯状に検出されたが、全体的に緩斜面である。比較的平らなグリッド杭 3G9j 周辺では掘立柱建物が検出されている。調査区南端部は遺構が希薄となる。黒ボク層下の検２面のものと合わせても 10 基程度しかない。

08Ba201SB　平場 B2 に立地する。２間×１間の掘立柱建物である。規模は短軸が 2.4m で長軸が 3.3m である。125SK・006SK・007SK・168SK・017SK・018SK で構成される。柱間間隔は 168SK・017SK・018SK 間ではそれぞれ 1.6m・1.7m である。

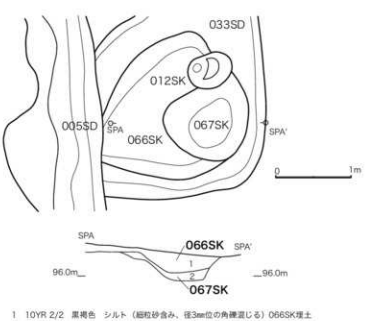
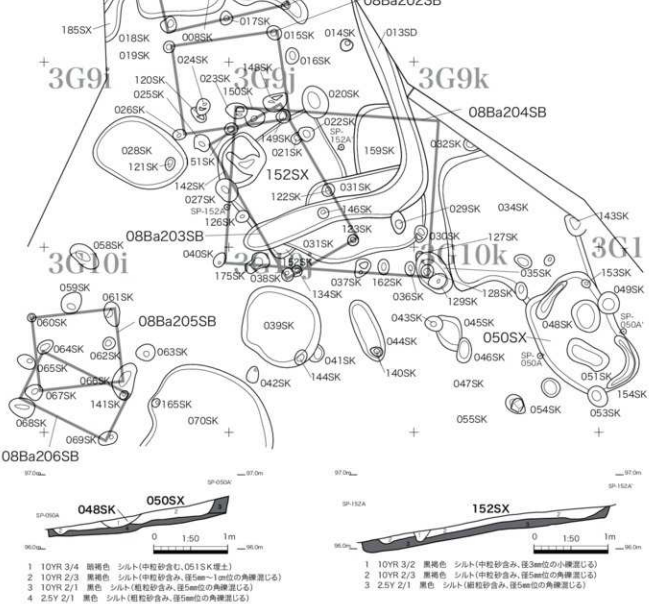


図 14　08A 区 066SK・067SK 遺構図

出土遺物は 017SK から中世以降の土師器鍋小片が出土している。

08Ba202SB　平場 B2 に立地する。1 間 ×1 間の掘立柱建物である。規模は短軸が 2.4m で長軸が 2.9m である。019SK・015SK・149SK・026SK で構成される。出土遺物はない。

08Ba203SB　平場 B2 に立地する。2 間 ×2 間の掘立柱建物である。規模は短軸が 2.2m、長軸が 4.2m である。025SK・150SK・148SK・122SK・123SK・038SK・126SK で構成される。出土遺物はない。



1　10YR 3/4　暗褐色　シルト（中粒砂含む、051SK 埋土）
2　10YR 2/3　黒褐色　シルト（中粒砂含み、径5mm～1cm位の角礫混じる）
3　10YR 2/1　黒色　シルト（粗粒砂含み、径5mm位の角礫混じる）
4　2.5Y 2/1　黒色　シルト（粗粒砂含み、径5mm位の角礫混じる）

1　10YR 3/2　黒褐色　シルト（中粒砂含み、径3mm位の小礫混じる）
2　10YR 2/3　黒褐色　シルト（中粒砂含み、径5mm位の角礫混じる）
3　2.5Y 2/1　黒色　シルト（粗粒砂含み、径5mm位の角礫混じる）

図 15　08Ba 区掘立柱建物遺構図

08Ba204SB　平場 B2 に立地する。2 間 ×3 間の掘立柱建物である。規模は短軸が 3.2m、長軸が 5.5m である。023SK・020SK・128SK・037SK・134SK・040SK・027SK で構成される。出土遺物はない。

08Ba205SB　平場 B2 に立地する。1 間 ×1 間の掘立柱建物である。規模は短軸が 2.0m、長軸が 2.3m である。060SK・061SK・066SK・067SK で構成される。出土遺物はない。

08Ba206SB　平場 B2 に立地する。1 間 ×1 間の掘立柱建物である。規模は短軸が 1.4m、長軸が 2.6m である。064SK・141SK・069SK・068SK で構成される。出土遺物はない。

08Ba003SX　調査区北端で検出された。不整形な土坑状の遺構である。南端は 006SX に重複し、先後関係は 006SX が後になる。長軸 2.3m で深さは 25cm で断面は皿状を呈することから、竪穴状遺構の可能性がある。出土遺物はなかった。

08Ba006SX　003SX・010SX に一部が重複して検出された。土層断面観察の結果、先後関係は 010SX → 003SX → 006SX となる（図 16）。南辺は直線的であるが他は不整形な土坑状を呈する。長軸 3.1m、短軸 2.6m で深さは 70cm で断面は皿状を呈することから竪穴状遺構の可能性がある。出土遺物はなかった。

08Ba010SX　006SX や 184SK に一部重複する遺構である。平面形は一辺が 2.4m の隅丸正方形である。中央部がさらに 1 段凹んで平らに掘られている。最深部は 28cm である。

08Ba012SX・184SK・185SX　調査区北端で検出された遺構である。東から西へと傾斜する地形の落ち込みで、185SX の堆積後 184SK が掘られその後 012SX が堆積する。184SK からは縄文土器片が出土したが、下層 185SX から山茶碗が出土しているため後からの流れ込みと考えられる。

08Ba050SX　調査区北部に位置する長軸 3.4m、短軸 2.2m の隅丸長方形となる竪穴状遺構である。深さは 14cm である。顕著な出土遺物はなかったが東隅にて壁溝状の溝（154SK）が検出されたことなどから、竪穴状遺構の可能性がある。

08Ba086SX・096SX　調査区南東部の緩斜面で検出された隅丸方形の遺構である。ほぼ同規模の 086SX と 096SX が東西に並立するように立地しており両者の間は 4.5m である。086SX は東西 4.3m 南北 7.0m 深さ 10cm の規模で平らな床面である。このことから中世竪穴状遺構（建物）の可能性が考えられるが、柱穴などの建築の痕跡が検出されていないことから断定は避ける。086 からは土師器皿の小片と土製品（E-21）が出土しており、中世～近世と考えられる。

08Ba152SX　調査区北部に位置する。203SB・204SB と重複しそれらに先行すると考えられる。平面形は、残存部分から一辺が 3.1m の正方形になると推定される深さは 13cm である。出土遺物はないが、形状から竪穴状遺構の可能性が考えられる。

08Bb 区の概要　今回の発掘調査で、比較的遺構・遺物が濃密に検出された調査区である。平場 B2 では掘立柱建物が 1 棟、竪穴状遺構 3 棟、平場 B3 では掘立柱建物 3 棟、竪穴状遺構 1 基

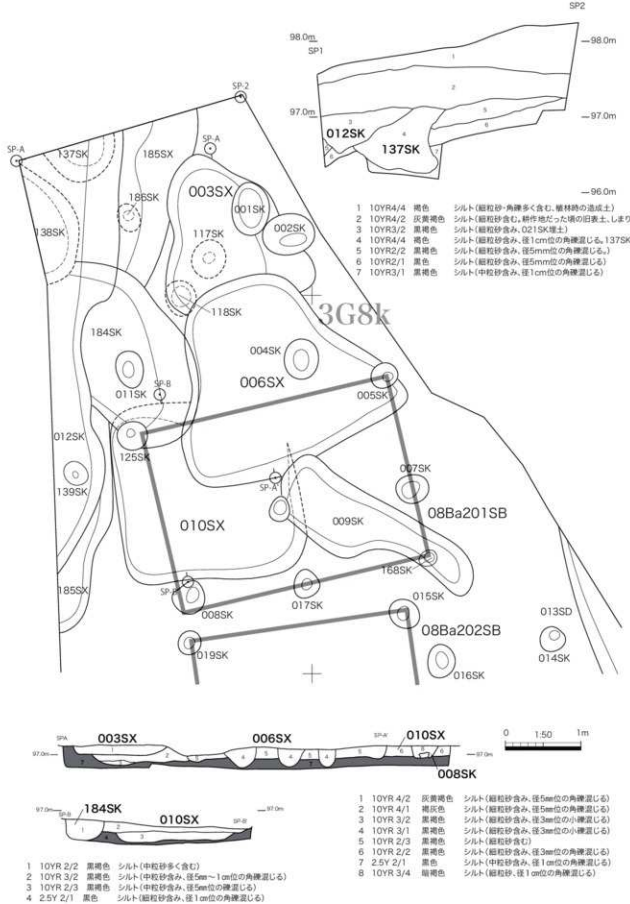


図16　08Ba区 003SX・006SX遺構図

が検出された。平場 B3 の 1 棟は調査区西端にあって孤立している。調査区北西隅は近年の撹乱が激しく、黒ボク層上面での遺構検出は不可能であったため、その下まで掘り下げて再度検出をおこなったが、木根状の撹乱がみられたのみであった。

08Bb201SB　調査区南西隅、周溝のある平坦面 095SX(後述)の中央に位置する。1 間 ×1 間の掘立柱建物で、107SK、101SK、099SK が検出され、その間隔は 3.7 ～ 3.8cm である。東隅の該当箇所は精査を行ったが検出されなかった。建物の方位が周溝をほぼ合致することから、建物の規模や性格に両者の関連を想定することも可能と考える。しかしながら 095SX も含めて顕著な遺物の出土はなく、建物としての時期も中世以降としか限定できない。

08Bb202SB　平場 B3 に位置する。南北 2 間 × 東西 2 間の掘立柱建物である。規模は短軸が 3.4m、長軸が 4.1m である。089SK、036SK、041SK、068SK、076SK、083SK、085SK で構成される。建物の四隅は明瞭であるが中間の柱穴は検出されていないものが多い。出土遺物は 036SK・068SK から山茶碗片が出土している。時期は概ね中世前半と考えられる。

08Bb203SB　平場 B3 に位置する。南北 2 間 × 東西 3 間の掘立柱建物である。規模は短軸(南北)

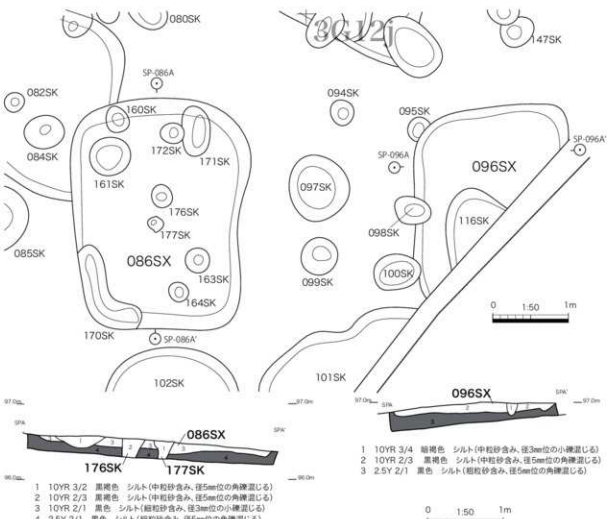


図 17　08Ba 区 086SX・096SX 遺構図

4.3m、長軸（東西）5.3m である。088SK、087SK、042SK、040SK、055SK、073SK、084SK で構成される。北西隅柱に該当する 088SK では山茶碗２点（E-68、E-69）がそれぞれ伏せた状態で出土しており、前者の底部外面には墨書「不カ」がなされている。これらは出土位置から推測すると、柱がない状況（解体後又は廃絶後）で遺構内に入ったとみられる。建物の時期をかなり限定的に示している資料といえる。他に 042SK から山茶碗と土師器皿、084SK から中世陶器片が出土している。これらの遺物から中世前半の建物と考えられる。

08Bb204SB　平場 B2 の南東縁に位置する。南北１間×東西２間の掘立柱建物である。規模は短軸（南北）が 3.1m、長軸（東西）が 7.8m である。138SK、150SK、015SK（149SK）、016SK（151SK）、010SK（112SK）で構成され、138SK 以外は上面で検出されている。138SK に関して

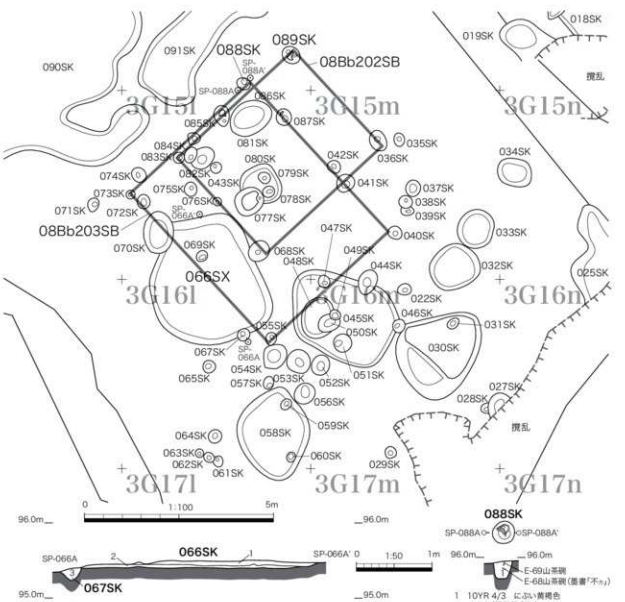


図 18　08Bb 区 B2 平場建物遺構図

は、下面で検出した際に 139SX より新しい遺構であることが明らかでありかつ 139SX が竪穴状遺構 006SX の掘り足りない部分であったことから、138SK は 006SX より新しい時期であり 08Bb204SB が 006SX より新しいものと判断される。出土遺物は 112SK より山茶碗と土師器皿が、143SK から山茶碗が出土している。時期は中世以降であるが、他の掘立柱建物と方位が近いことを考慮すると中世前半に限定しうる。

08Bb003SX　調査区北端に位置する。一辺が 3.2m 以上の竪穴状遺構と考えられる。深さは 6cm にすぎないが、山茶碗と中世以降の土師器小片が出土している。

08Bb006SX（139SX）　平場 B2 に位置する竪穴状遺構である。上面で 006SX として検出し、下面で 139SX として再検出した遺構である。006SX としては東西 2.6m 南北 3.7m の隅丸方形に検出され壁面は傾斜する。139SX は 006SX とはやや向きが異なり等高線に平行な隅丸長方形（3.2m×1.9m）に検出された。後者の方がより精度の高い検出がなされているので、139SX の形状をもとに復元を行うべきであろう。底面はほぼ水平であり 006SX 検出面からの深さは 29cm である。山側に周溝とみられる深さ 7cm の溝状の凹み（145SD）がある。底面で柱掘方と考えられる遺構は検出されなかったので上屋構造は不明であるが、遺構の形状から竪穴建物の系譜をひく竪穴状遺構と考える。出土遺物は少ないが山茶碗と土師器皿の小片が出土している。時期は概ね中世と考えられる。

08Bb011SX　006SX の東側に位置する。一辺が 1.8m 以上の竪穴状遺構と考えられる。深さは 7cm で、出土遺物はなかった。

08Bb066SX　平場 3 に位置する竪穴状遺構である。山側は隅丸方形となるが他は不整形である。長軸は 3.5m である。底面は平らで検出面からの深さ 18cm である。出土遺物は山茶碗の小片が出土している。時期は中世以降と考えられる。

08Bb095SX　調査区南西隅に位置する。東西 6.4m 南北 7.5m のやや不整な方形を呈する、地山を掘り込んだ平らな造成面である。その縁辺は 109SD・093SD・101SK・096SD などの溝状遺構が周溝状に展開している。095SX の中央では柱穴状の土坑である 099SK・101SK・107SK などが検出されている。これらの土坑の配置から 08Bb201SB が想定され、1 間 ×1 間規模の掘立柱建物を建てるためになされた造成と考えられる。出土遺物は小片ばかりではあるが、中世以降の土師器皿に加えて戦国時代以降の瀬戸美濃産陶器（天目茶碗）も出土している。このことから、比較的後から造成された可能性も考えられる。

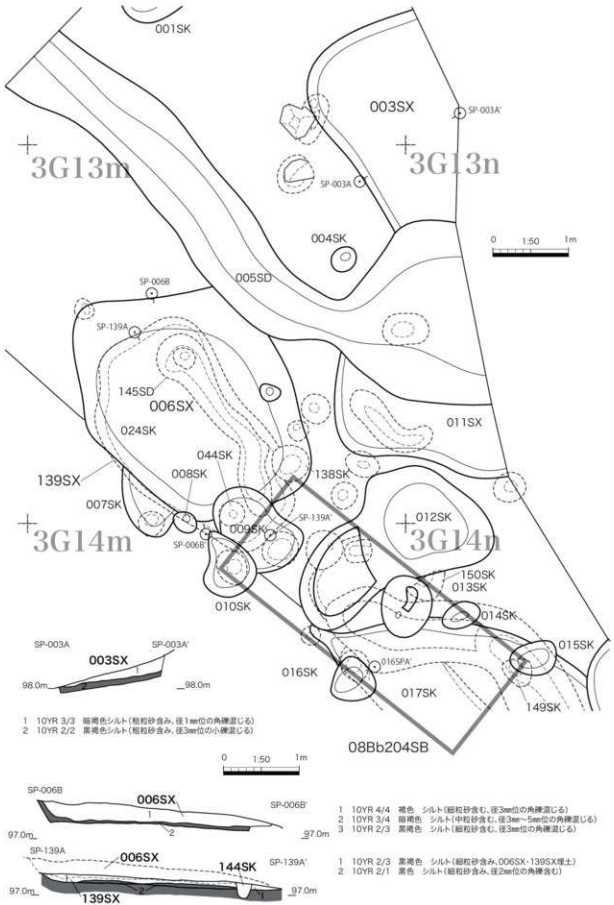


図 19　08Bb 区 006SX（139SX）遺構図

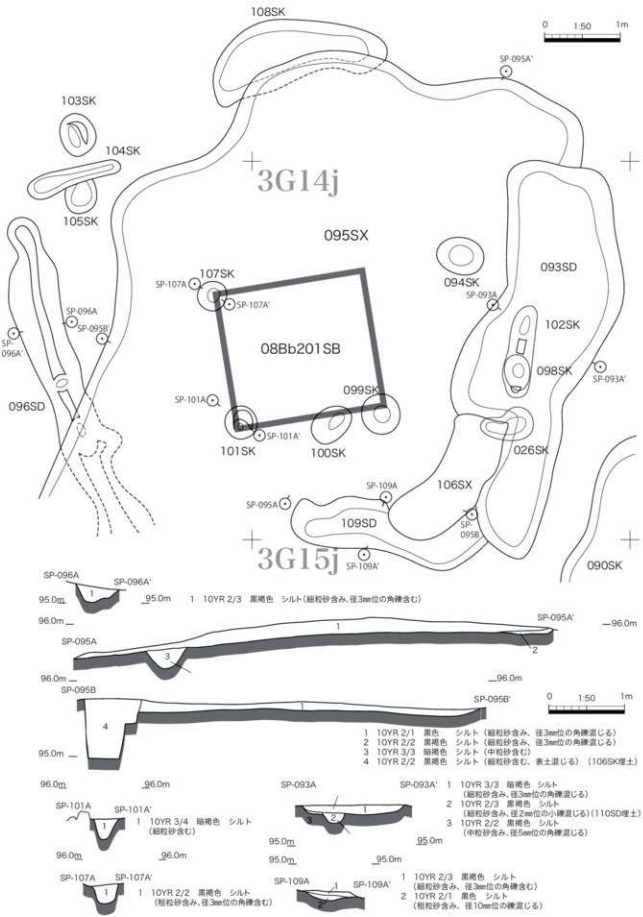


図20　08Bb区 095SX 遺構図

第３章　出土した遺物

第１節　概要

柿下遺跡の発掘調査で出土した遺物はコンテナで５箱分であり、総重量は約 15kg（収納用ポリ袋含む）である。5cm 四方以下の小片の状態のものが多く、それらを接合して形状復元できたものは２点である。また、完形あるいはそれに近い状態で出土したものは 14 点に過ぎず、小皿類がその多くを占める。

出土遺物の構成は土器が大半を占め若干の石器・石製品と鉄器がある。時代別には縄文時代、平安時代、鎌倉時代、室町・戦国時代、江戸時代であり、鎌倉時代のものが他を抜いて多数である。

出土状況は、ほとんどが表土あるいは包含層や遺構検出面となっており、遺構内から出土し遺構の時期や性格を示すものは少ない。

以下、調査区ごとに遺構、遺構検出面、表土の順に実測図を提示する。なお番号は、当センター遺物登録番号に対応する。石製品（S）、金属製品（M）は記号を付記、土器（E）は省略する。

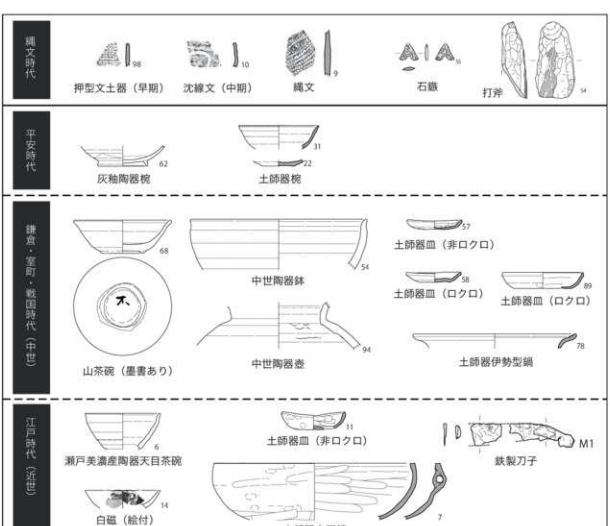


図 21　柿下遺跡出土遺物組成図

第２節　08A 区

M1 は 012SK から出土した刀子である。1 は伊勢型鍋の口縁。2 は手捏ね土師器皿である。内面横指ナデで丸底につくる。

以下は検出面出土のもの。3・4 は山茶碗。5 は渥美もしくは常滑産の大甕胴部片。外面は粘土積み上げ痕を平行タタキの後に指ナデ消し。6 は瀬戸美濃産天目茶椀。大窯 4 期か。7 は土師器内耳鍋。浅い形状から江戸時代と考えられる。8 ～ 10 は縄文土器。8 は縦方向に沈線で施文される深鉢の口縁部。胎土中に植物繊維痕もみられる。9 は結節のある縄文を転がして施文したもの。10 は中期後半の深鉢口縁。胎土中に砂粒が多く含まれる。11・12 はほぼ同一地点で出土した手捏ね土師器皿。11 は楕円形しており底部に焼成後の穿孔あり。S1・S2 も 11・12 の付近で出土した砥石。

13 以降は表土出土。14 は白磁碗。口縁がわずかに波状になる。内外に染め付け。15 は土師器内耳鍋で 11・12 付近の崖状に崩れた所の表土中から出土した。ほぼ半分が復元可能。形状から戦国時代の可能性が考えられる。16 も土師器内耳鍋。外に張り出した口縁と外面のハケ調整痕が特徴である。形状は浅くなるとみられ、江戸時代であろう。S3 は砥石。S4 は磨製石斧だが激しい使用によってほとんど表面が剥落している。石材は変玄武岩。

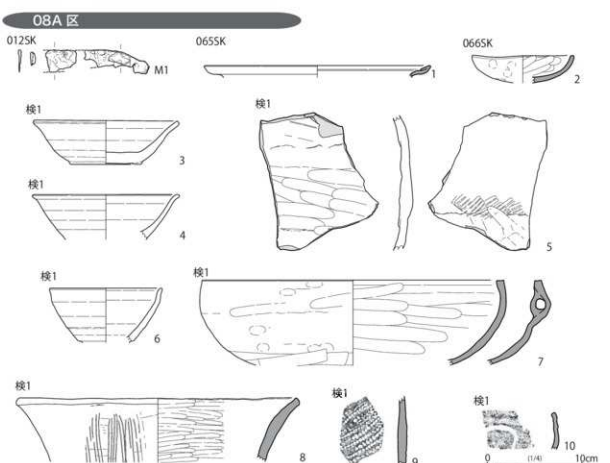


図 22　08A 区出土遺物実測図（1）

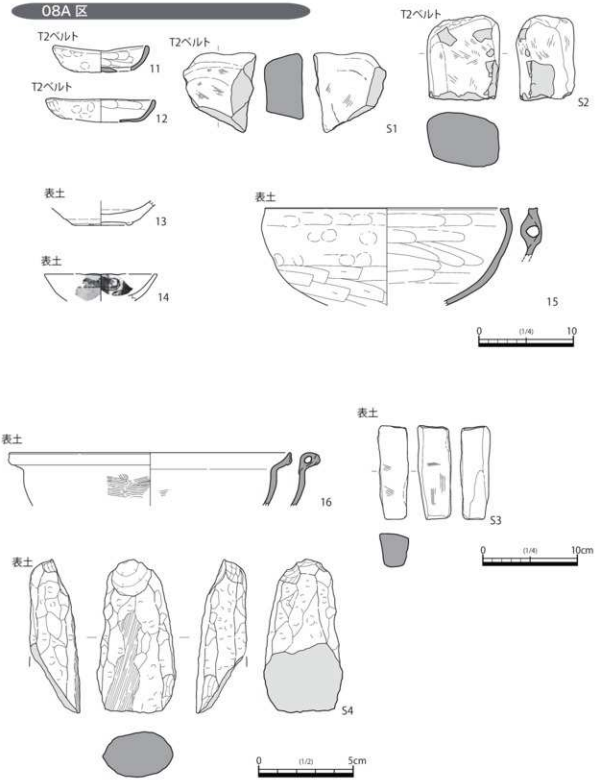


図 23　遺物 08A 区実測図（2）

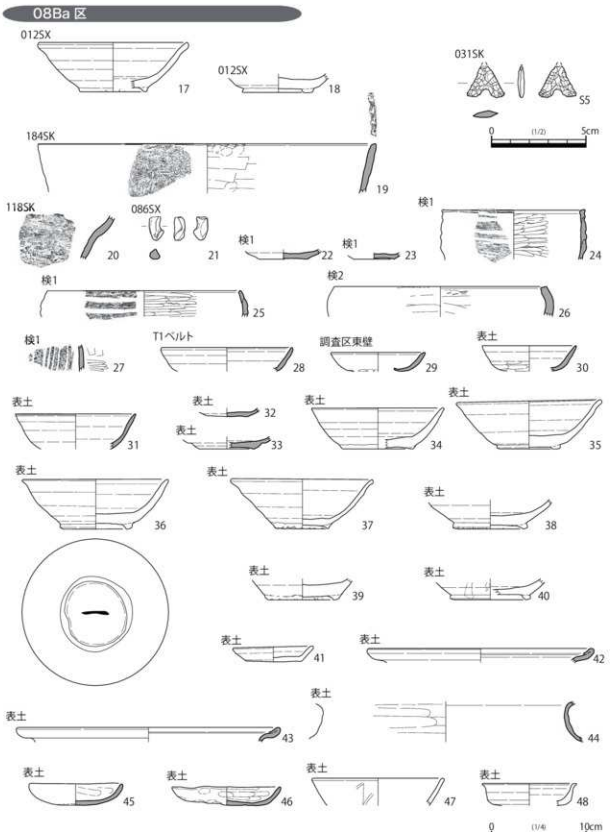


図 24　08Ba 区出土遺物実測図（1）

第 3 節　08Ba 区

17・18 は 12SX 出土の山茶碗。概ね 13 世紀台となろう。S5 は石鏃。19・20 は遺構出土の縄文土器。19 は口唇部に半截竹管による連続する押し引き施文。20 は早期（茅山下層式）の条痕文系。21 は竪穴状遺構出土の土製品。手捏ねで、先端は軽く拳を握るように作られている。また胎土も比較的土師器皿に近い。これらの点から土偶である可能性は低く、中世以降の土製品の可能性を考えておきたい。

以下は検出面出土。22・23 は土師器底部で回転糸切痕が残る。砂粒の少ない胎土が特徴。24・25 は同一個体とみられる縄文土器。内傾気味の口縁を四角く面取りし、内面はミガキ。貝殻でない原体で施文。26 は縄文土器とみられるが無文のため詳細不明。勝坂式の可能性もある。27 は前期末～中期初め。

以下は表土などから出土。28・30 ～ 33 はロクロ成形の土師器椀。22・23 同様に砂粒が少なく体部の立ち上がりが明瞭で口縁は少しずつ薄くなっており、中世以降の土師器皿とは異なる。32･33 は回転糸切痕がある。34 ～ 39 は山茶碗。34 ～ 36 は貼付け高台。36 の底部外面に「一」の墨書がある。37 ～ 39 は底部に籾痕ある。時期および産地の違いを示すか。40 は灰釉陶器末期の椀。41 は山茶碗系の陶器皿。42 ～ 44 は伊勢型鍋。他に胴部片もあるが復元不能。口縁部が大きく外反し頸部が直立する特徴から 13 世紀前半と考えられる。29・45・46 は手捏ね土師器皿。47 は青磁碗。鎬蓮弁の一部がみえる。48 はもっと内傾し広口壺状になるかもしれない。須恵器とも中世陶器とも判じがたい焼成である。もし前者であるならば扁平台付壺の可能性もあろう。S6・S7 は石器剥片である。S7 は微細な使用痕（一部に剥離）がみられこの状態で使用したことが考えられる。S6 は安山岩、S7 は灰白色を呈する流紋岩。

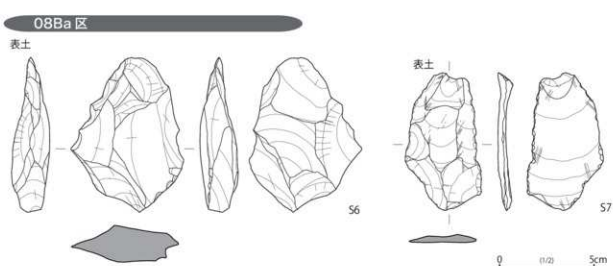


図 25　08Ba 区出土遺物実測図（2）

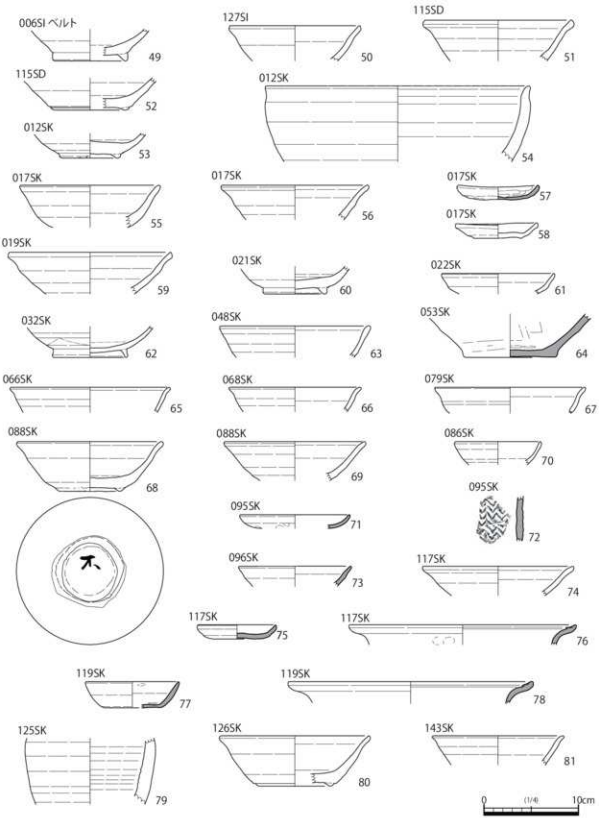


図 26　08Bb 区出土遺物実測図（1）

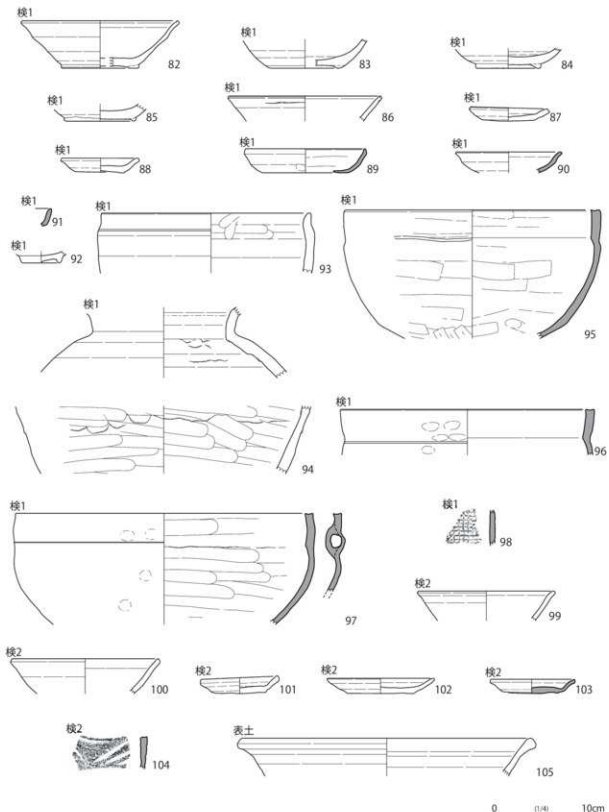


図 27　08Bb 区出土遺物実測図（2）

第 4 節　08Bb 区

49 は竪穴状遺構 006SI 出土。高台がしっかりした作りで初期の山茶碗。50・51 は山茶碗で 13 世紀代であろう。52・53 は 34 ～ 36 同様の扁平な貼付け高台。概ね 12 ～ 13 世紀代。54 は陶器鉢。55 ～ 56 は 017SK から出土。57 は手捏ね土師器皿。58 は軟質の山茶碗系陶器皿。59 ～ 61・63・65 ～ 70・74・80・81 は山茶碗。68 は底部外面に不鮮明だが「不」とみられる墨書みえる。62 は灰釉陶器椀。漬け掛け釉と高い高台が特徴で折戸 53 号窯期であろう。71・75 は手捏ね土師器皿。72 は縄文時代早期の押型文土器。73・77 はロクロ成形土師器碗。76・78 は伊勢型鍋。79 は灰釉陶器の瓶類。

以下は検出面出土遺物。上面での検出（検 1）では戦国時代以降の遺物（95）なども含まれるが、下面（検 2）からは鎌倉時代以前の遺物に限られる。82 ～ 86・99・100 は山茶碗。87・88・101・102・103 は山茶碗系の陶器皿。103 は軟質の焼成で褐色を呈する。89・90・91 は土師器皿。89・90 はロクロ成形であるが、同じロクロ成形（30・77 など）とは異なる。特に 89 は底部が薄く、南勢系土師器皿と考えられる。92 は天目茶碗。93 は口縁部が直立する陶器。断面形状は 54 に似るが口縁を面取り外面に一条の沈線を廻らすなど違いがある。経筒外容器の可能性もあろう。94 は渥美もしくは常滑産の陶器壺。実測図以外に破片が多数ある。95 ～ 97 は土師器内耳鍋いずれも外面上部に一条の沈線を廻らせる。16 世紀後半とみられる。98 は縄文時代早期の押型文土器。格子状の施文がある。104 は縄文土器で内傾する波状口縁の一部である。沈線は、断面が丸く明瞭に引かれていることから丸棒状工具を用いたものらしい。茅山下層式～野島式の可能性が考えられる。

表土・撹乱から出土したものがある。105・106 は陶器鉢のそれぞれ口縁部と底部である。107 は戦国時代以降の土師器茶釜。撹乱は調査区東端の砂防工事による埋め立て部分である。S8 は磨製石斧。

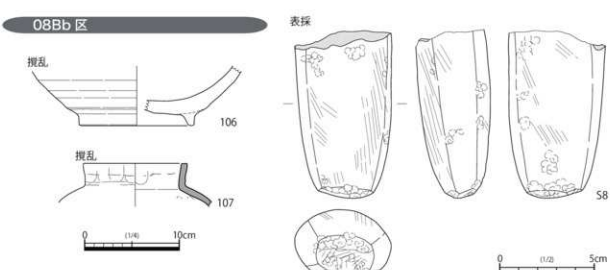


図 28　08Bb 区出土遺物実測図（3）

第４章　自然科学分析

第１節　新城市中央部、柿下遺跡における地下層序

はじめに　新城市中央部、柿下遺跡にて地下層序を観察する機会を得た。その層序解析、放射性炭素年代測定の結果を報告する。

試料および分析方法　地下層序解析のため、調査区において遺構検出面からバックホーにより掘削し層序断面を露出させ、層序断面図の作成と試料採取を行なった。層序断面図の作成にあたり、層相・粒度・色調・堆積構造・化石の有無などの特徴を詳細に記載した。層序断面からは放射性炭素年代測定用試料を採取した。

放射性炭素年代測定は加速器質量分析（AMS）法により測定を行なった。加速器質量分析法は 125 μ m の篩により湿式篩別を行ない、篩を通過したものを酸洗浄し不純物を除去した。石墨（グラファイト）に調整後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクト AMS: NEC 製 1.5SDH）にて測定した。測定された ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行なった後、補正した ^{14}C 濃度を用いて ^{14}C 年代を算出した。^{14}C 年代値の算出には、^{14}C の半減期として Libby の半減期 5,568 年を使用した。^{14}C 年代の暦年代への較正には OxCal4.1（較正曲線データ：INTCAL04）を使用した。なお、1 σ 暦年代範囲は、OxCal の確率法を使用して産出された放射性炭素年代誤差に相当する 68.2% 信頼限界の暦年代範囲であり、カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。測定は株式会社パレオ・ラボ（Code No.; PLD）に依頼した。

分析結果 (1) 深掘層序　08A 区で 1 地点、08Bb 区で 1 地点の計 2 地点でバックホーによる掘削を実施した（図 1）。各地点の層序の特徴を以下に述べる。

南側に位置する地点 1（08A 区）では遺構検出面（標高 93.20m）から深度約 2.3m の層序断面を得た（図 2・図 3）。下位層より、標高 90.90 ～ 91.80m は灰オリーブ色 (5Y6/2) を呈する極粗粒砂層からなる。堆積構造は認められず全体に塊状である。砂層の固結度は低く、草刈りガマ（手ガリ）

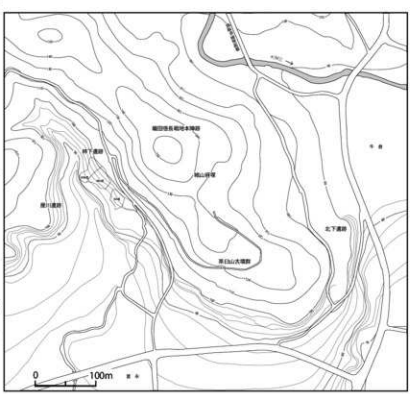


図 29　柿下遺跡周辺等高線図

で簡単に崩れる。標高 91.80 ～ 92.55m は基質が黒褐色（10YR2/1）で中礫や大礫、極粗粒砂の混じる腐植層からなる。含まれる礫は角礫がほとんどで、礫そのものの風化が進んでいるものが多い。基質の固結度はたいへん低く、草刈りガマでひっかくと容易に崩れてしまう。堆積構造は認められない。本層の最下部（標高 91.83m）と中央部（標高 92.20m）の 2 層準で放射性炭素年代のための試料を採取した。標高 92.55 ～ 93.20m はにぶい褐色（7.5YR6/3）で中礫や大礫、極粗粒砂を含む粘土質シルト層からなる。礫は角礫からなり、地層中に無秩序に含まれておりファブリクはみられない。

北側の地点 2（08Bb 区）では遺構検出面（標高 96.16m）から深度約 4.4m の層序断面を得た（図 4・図 5）。下位層より、標高 91.76 ～ 93.06m は黄褐色(2.5Y7/3)の極粗粒砂層で、堆積粒子どうしは揺る詰めで淘汰は良いものの、構成される花こう岩類から由来する長石類などの鉱物の風化の程度は進んでおり、草刈りガマでひっかいたり指で鉱物をつまむと簡単に崩れてしまう。標高 93.06 ～ 94.26m はにぶい褐色（10YR5/3）を呈する極粗粒砂の混じる粘土層である。固結度は低く、含まれる極粗粒砂の粒子を構成する鉱物は風化の進んだもので、草刈りガマで簡単に崩れる。標高 94.26 ～ 94.76m は黄褐色（2.5Y7/3）を呈する細礫混じりの極粗粒砂層である。標高 94.76 ～ 95.56m は黒褐色（10YR2/1）の細礫あるいは極粗粒砂の混じる腐植層である。堆積粒子間に含まれる気相の割合が高いため、草刈りガマでひっかくと簡単に崩れてしまう。堆積構造はみられない。いわゆる黒ボク土状を呈する。本層の中央部、標高 95.06m の層準で放射性炭素年代測定用の試料を採取した。標高 95.56 ～ 96.16m は黒褐色（10YR2/1 ～褐灰色（10YR4/1）の礫や極粗粒砂の混じる粘土質シルト層である。本層の頂部が柿下遺跡の検出面となる。

分析結果 (2) 放射性炭素年代測定　地点 1(08A 区)・地点 2（08Bb 区）とも黒褐色を呈する礫～極粗粒砂混じ

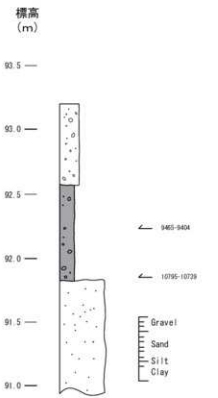
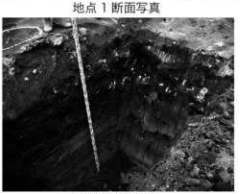


図 30　地点 1 柱状図

地点 1 断面写真



地点 2 断面写真

りの腐植層で試料を採取した。測定結果を表1に記す。地点1では黒褐色腐植層の下部、標高91.83mで採取した土壌が10795-10739 cal yrs BP(BC 8846-8790)（PLD-13983)、黒褐色腐植層の中央部、標高92.20mから採取した土壌が9465-9404 cal yrs BP(BC 7516-7455)(PLD-13984)の数値年代を得た。北側の地点2では黒褐色腐植層の中央部、標高95.06mから採取した土壌が7567-7507 cal yrs BP(BC 5618-5558)(PLD-13982)の年代値であった。

考察 (1) 柿下遺跡の地下層序　柿下遺跡において深掘を実施した。それらの地下層序を観察すると、2地点とも最下位層は極粗粒砂層からなり、砂層を構成する領家帯の花こう岩類に由来する長石類の鉱物の風化は著しく、草刈りガマでひっかくと簡単に崩れる特徴をもっている。これらの砂層を地点1（08A区）では黒褐色を呈する礫や極粗粒砂の混じる腐植層が覆っていた。地点2では最下位層である極粗粒砂層を黒褐色腐植層が直接は覆わず、最下位層の上に極粗粒砂の混じる粘土層や極粗粒砂層を挟み、その上を礫や極粗粒砂の混じる黒褐色腐植層が覆った。2地点で認められた黒褐色粘土層はいわゆる黒ボク土状を呈し、見かけ上似た層相をしており、同じ堆積年代を示すものと予想された。しかし、放射性炭素年代測定値では、層準の標高が低い地点1の標高91.83mで採取した土壌が10795-10739 cal yrs BP(BC 8846-8790)（PLD-13983)、標高92.20mから採取した土壌が9465-9404 cal yrs BP(BC 7516-7455)(PLD-13984)の数値年代が得られた。いっぽう、層準の標高の高い地点2では黒褐色腐植層の標高95.06mから採取した土壌が7567-7507 cal yrs BP(BC 5618-5558)(PLD-13982)の年代値を示した。このように岩相層序では区分できないが、地層に含まれる有機物の放射性炭素年代測定では約10000～9000年前代と、7500年前代を示し、試料の年代に差異がみられた。

ところで、三河湾の河口から新城市までは豊川の中・下流域にあたる。豊川の中流および下流域に発達する段丘面と段丘堆積物は土 (1960)、町田・大倉 (1960)、木村ほか (1981, 1982) により記載が行なわれ、木村ほか (1981, 1982) は愛知県鳳来町長篠付近から三河湾にそそぐ豊川河口までの豊川の中流および下流沿いに発達する段丘地形と更新統について報告をしており、段丘の形成年代の古い方から高位段丘、

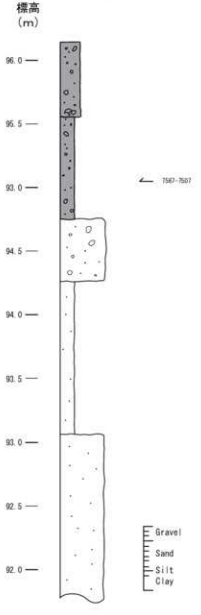


図31　地点2柱状図

地点	調査区（区）	標高（m）	堆積物	試料の種類	¹⁴C年代（yrs BP）	δ¹³C（‰）	1σ暦年代範囲（AD/BC probability）	1σ暦年代範囲（cal yrs BP, probability）	Lab code No.（method）
地点1	08A	91.83	黒褐色礫～極粗粒砂混じり腐植層	土壌	9535±30	−23.82±0.14	BC 8646–8790(23.5%)	10795–10739(23.5%)	PLD-13983(AMS)
							BC 9118–9071(21.0%)	11067–11020(21.0%)	
							BC 9059–9009(20.0%)	11008–10958(20.0%)	
							BC 8914–8903(3.7%)	10863–10852(3.7%)	
地点1	08A	92.20	黒褐色礫～極粗粒砂混じり腐植層	土壌	8375±30	−22.03±0.16	BC 7516–7450(60.0%)	9465–9404(60.0%)	PLD-13984(AMS)
							BC 7392–7381(8.2%)	9341–9330(8.2%)	
地点2	08Bb	95.06	黒褐色礫～極粗粒砂混じり腐植層	土壌	6645±25	−24.84±0.12	BC 5618–5558(68.2%)	7567–7507(68.2%)	PLD-13982(AMS)

表1　^{14}Cリスト

旧期扇状地、中位段丘、新規扇状地、低位段丘に分けた。新城市北部の柿下遺跡周辺には高位段丘堆積層が分布する地域にあたり、豊川の左岸側には渥美層群（天伯原礫層を含む）を不整合で覆って小野田礫層が覆い、豊川の右岸側には信玄礫層の上を一部不整合、一部整合で覆って矢部礫層が分布するとされる。柿下遺跡の南東約1.8kmに信玄礫層の分布する地名「信玄」がある。信玄礫層は木村ほか(1982)の記載では、最大礫径50cmにおよぶ巨礫を混じえた大礫を主とする礫層と砂および炭質物を含むシルトのレンズ状層からなるとされる。今回の柿下遺跡の調査では深掘を行なったが、最下位層で大礫層はみられず、最も粗粒なところで極粗粒砂層からなった。また、信玄礫層を覆う矢部礫層は柿下遺跡から南東へ約2.3km離れた新城市清井田を模式地として信玄礫層よりもさらに粗粒であるとの記載がある。これら礫層の分布する豊川右岸側はその礫層が認められる層準の標高をもとに段丘面の区分が行なわれており、矢部礫層は標高110mを地形面の模式地とされ、矢部面と呼ばれる。矢部面よりも比高で約10m低く、標高100mの地形面を模式地とする浸食面は信玄面とされる。今回の柿下遺跡において深掘層序の標高の高かった頂部は地点1（08A区）で標高93.20m、地点2（08Bb区）で標高96.16mで2地点とも標高100mに満たない。柿下地点での深掘層序の標高や構成される堆積物の特徴から考えて、本調査地点には高位段丘を構成する地層は分布していないと考えられる。

考察(2) 柿下遺跡の堆積地形の成因　柿下遺跡の調査地点は地質学的には中生代白亜紀のころの領家帯の花こう岩類が分布する地域にあたる。領家帯の花こう岩類は、花こう岩の固結した地質年代が濃飛流紋岩よりも古いか、新しいかで分けられ、古い方を古期領家花こう岩類、新しい方を新期領家花こう岩類とよぶ。このうち柿下遺跡のある新城市北部には新期領家花こう岩類の下位である新城トーナル岩が露出する（森下ほか，1996; Suzuki et al., 1998; 鈴木・三宅，2006）。かつて新城石英閃緑岩とよんでいたものがこれにあたる。

柿下遺跡の西側には水平距離にして約10～30m隔たって河川が南方へ流れている。この河川は調査地点から南へ約1.7kmで新城市矢部付近から南流してくる流路と合流し半場川となって、遺跡から約2.4km南で豊川と合流する。現在の河川流路から比高にして約4～9m上に経線に沿う谷幅約160mをもって、河川の左岸側に東西方向の長さ約50m、南北方向の長さ約200mの南西方向に緩く傾斜した平坦面の上に遺跡は立地した（図1）。傾斜面をつくる山地と平地との接点を山麓とよぶが、山麓付近には山地から運搬されてきた岩屑が谷の出口付近に堆積地形をつくる。その地形の規模は山地で生産される岩屑の体積、堆積する空間の広さ、流下

する河川の側方浸食の状況などによって決まる。筆者は柿下遺跡周辺の地質調査を行なったが、調査地点の東にある標高の最高点 150m の尾根には標高 100m よりも高い部分に新城トーナル岩が露出していた。新城トーナル岩は風化にきわめて弱く、風化により石英や長石類、黒雲母などを鉱物単体として、あるいはそれらが組み合わさった岩塊として砕屑物を生産する。また、調査地点よりも東の尾根の等高線をみると、等高線の幅は東側で広く、西側で狭い。つまり西側ほど急傾斜であることを示す。斜面の傾斜が急であるほど重力の要因がはたらく。重力が主にはたらく場合、斜面上にある物質が流水などの媒体を介さずに斜面を落下するときがある。特に風化層が厚い斜面では雨や地震によって砕屑物が崩れ落ちる例がある。この現象の繰り返しにより砕屑物が集積した地形を地理学・地質学用語で崖錐という。柿下遺跡は風化に対して極めて弱い新城トーナル岩がつくる急斜面の直下にあり、遺跡の立地する地下基底には崖錐堆積物がたまっているものと思われる。また、遺構検出面の地下を構成する地層には黒褐色を呈する腐植質粘土層や粘土層やシルト層、あるいは極粗粒砂層が累重した。これらの地層には不明瞭ながらも層理面が認められることから、地層のたまる一時期に堆積物を運搬する水の水理条件の変化が生じたことがわかる。つまり遺跡の地下を構成する地層は河川により運ばれてきたことを示すのである。加えて、各地層は単一の堆積粒子からなるのではなく、中礫や大礫などの礫、極粗粒砂などの砂の粒子を地層中に無秩序に含む。こういう特徴をもつものに土石流堆積物があるが、柿下遺跡の場合、堆積物のファブリックには土石流の特徴がみられず土石流であるとは考えられなかった。腐植質粘土層や粘土層、シルト層に含まれる礫や粗粒な砂粒子は、調査地点よりも標高の高い位置にある風化した新城トーナル岩からの崖錐堆積物であると考えられる。以上のように、柿下遺跡でみられる東西方向の長さ約 50m、南北方向の長さ約 200m の南西方向に緩く傾斜した平坦面は、山地から南流する河川と調査地点東の尾根をつくる新城トーナル岩の崖錐堆積物との複合したものであるといえる。この一連の堆積物は、標高 91.80 ～ 92.55m でみられる黒褐色腐植質粘土層の放射性炭素年代測定より約 10000 ～ 9000 年前代の値がでているため、柿下遺跡の地下層序は約 10000 年前以前から堆積地形の形成がはじまっていたことがわかった。

謝辞　本論を作成するにあたり、愛知県新城市北部に分布する段丘堆積物について豊川市立小坂井西小学校の荒巻敏夫氏、豊川市立代田中学校の中尾宜民氏にご教示をいただいた。放射性炭素年代測定では株式会社パレオ・ラボAMS年代測定グループの小林紘一氏・丹生越子氏・伊藤　茂氏・廣田正史氏・瀬谷　薫氏・Zaur Lomatatidze氏・Ineza Jorjoliani氏にお世話になった。分析試料の整理・保管と原図の作成では整理補助員の前田弘子氏・鈴木好美氏にお手伝いいただいた。記して厚くお礼申し上げます。　（鬼頭　剛）

文献　木村一朗・荒巻敏夫・大澤正吾・池田芳雄，1981, 豊川中流および下流の段丘と更新統（その1, 段丘面），愛知教育大学研究報告（自然科学），30, 221-232.

木村一朗・荒巻敏夫・大澤正吾・池田芳雄，1982, 豊川中流および下流の段丘と更新統（その2, 段丘堆積物），愛知教育大学研究報告（自然科学），31, 195-210.

土　隆一，1960, 渥美半島周辺の第四系の地史学的問題，第四紀研究，1, 193-211

町田　貞・大倉陽子，1960, 豊川中・下流の段丘地形，地理学評論，33, 551-563.

森下泰成・鈴木和博・那須利幸，1996, 三河－東濃地域の花崗岩類のCHIMEモナザイト年代，日本地質学会第103年学術大会講演要旨，282.

Suzuki, K., Nakazaki, M. and Adachi, M., 1998, An 85±5 Ma CHIME age for the agigawa welded tuff sheet in the oldest volcanic sequence of the Nohi Ryolite, central Japan, Jour. Earth and planet. Sci., Nagoya Univ., 45, 17-27.

鈴木和博・三宅　明，2006, 領家変成帯　低圧高温変成作用　概説，日本地方地質誌4中部地方，朝倉書店，230-231.

第５章　総括

第１節　柿下遺跡における中世の開発

中世の柿下遺跡　本章ではこれまでの報告内容を総括し、地域史における柿下遺跡の位置付けを試みたい。特に、遺構・遺物の大半が属する中世の動向は、遺跡周辺が文献史料で知られる荘園の比定地であることからも、その初現や性格について一定の見通しを立てておく必要がある。そこで本来ならば、出土遺物によって遺構の年代を絞り込みその変遷を提示すべきなのであるが、柿下遺跡の発掘調査では遺構から良好な状態で検出された遺物が少なく、その帰属年代の不明なものが多い。加えて、出土遺物の大半を占める土師器皿類の、東三河地域における編年が未確定という事情がある。そのため特に土師器皿類で提示した中世や近世といった大まかな時期区分でさえも確定的ではない部分があることを断っておきたい。

柿下遺跡では、同一検出面において縄文時代中期から江戸時代に至るまでの遺構が検出される一方、縄文時代早期～中期に特定できる遺構はなく、遺物についても表土や包含層から小片で出土したものが多い。つまりより上方からの流れ込みの可能性も含めて、後者の時期の遺構は流失している可能性が考えられる。また各調査区南西端は崖であり谷底を川が流れているが、遺物が崖面でも出土することから河川浸食によって遺構面が削られつつあった場所でもある。このことから縄文時代中期以降に限ってみれば、茶臼山南西麓の沖積地（扇状地）が削り込まれ、谷が深まりつつあったところに平場（集落域）が形成されたものといえる。ただし縄文時代中期の遺構は土坑（08Bb053SK）１基のみで墓坑であったと考えられ、居住空間として利用されるようになったのは概ね中世以降とみなせる。その初現は 08Bb032SK 出土の灰釉陶器椀（10 世紀前半）であるが、第３章でみたように、一定量の遺物が出土するのは山茶碗（12 世紀前半）以降と考えられる。したがって柿下遺跡の中世集落は平安時代末期に始まったと考えられる。

中世の遺構・遺物群　そこで先述の目的に沿って、中世の遺構と平場の相関をみてみよう。遺構の年代と関わりそうな小平場は、08Bb 区から 08A 区にのびる平場 A1 ～ B1 と平場 A2 ～ B2 の２段である。特に平場 B2 の掘立柱建物 203SB の柱穴 088SK から出土した鎌倉時代の山茶碗は、203SB の廃絶時期を示すと考えられるが（第２章参照）、建物の向きは平場 A1 ～ B1 と平場 A2

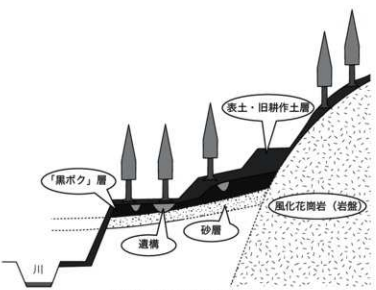


図 32　柿下遺跡地質概念図

～ B2 間の切岸とほぼ同じである。この切岸は近世以降の改変もあるだろうが元は 203SB の建立にあたってつくられたものである可能性が高い。つまり平場 B2 は鎌倉時代にほぼ成立していたと考えていいだろう。

次に、小平場内ごとに遺構が集中する範囲を抽出し、加えて出土遺物の時代相に照らし合わせていくつかの遺構群として把握してみる。遺構の集中は遺構全体図を参照することで浮かび上がる。すなわち (1)08Ba 区北端部の竪穴状遺構と掘立柱建物、(2)08Ba 区南西部の竪穴状遺構 2 基、(3)08Bb 区北東部の平場 B2 に展開する竪穴状遺構と掘立柱建物、(4)08Bb 区西端にやや孤立して存在する 095SX と掘立柱建物、(5)08Bb 区南半部のやや大きな平場 B3 に展開する掘立柱建物、(6)08A 区平場 A2 の掘立柱建物など、の 6 群がある。これらは (1) ～ (3)・(5) が平安時代末期～鎌倉時代の遺物を伴い、(4) が鎌倉～江戸時代の遺物を寡少ながら伴う。

なお、(6) では鎌倉～江戸時代の遺物がみられるが、特に戦国～江戸時代の遺物は平場 B3 南端にも分布している。平場が砂防施設によって分断されていることを考え合わせると、(6) の範囲がそこまで展開していたとみなせる。一方 08A 区出土の平安時代末期～鎌倉時代の遺物が (5) と一連のものの可能性もあるが、だとしても遺構・遺物群の外縁に位置する点では変らない。このことから遺構・遺物の集中域が、鎌倉時代から戦国時代にかけて南東方向へ移動したと見なすこともでき、それがさらに進んで現在の集落地へと変遷したのではないかと思わせる。いずれにせよ (5)・(6) は、平安時代末期以降における柿下遺跡の中心であるといっても過言ではない。

それでは、(1) ～ (4) はどのような位置づけが可能であろうか。まず (4) と (5) の間では顕著な遺構が見当たらないことから、もとは土塁状の高まりで両者を隔てていたものが後代に削平されたとみられる。次に (1) ～ (3) であるが、狭い範囲で遺構の重複がみられ利用可能範囲が限定的で

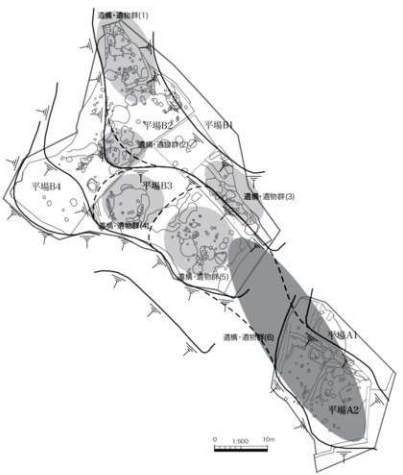


図 33　柿下遺跡の中・近世の遺構群

あったことをうかがわせる。これらに直接関係する造成遺構は見出せないが、斜面地の起伏に応じて土地利用をした結果、遺構群どうしの間隔が生じたものと考えられる。特に(1)と(3)の間は尾根筋で分断されていたのであろう。

(1)・(3)・(5)は、出土遺物によると、平安時代末期に居住が始まったと考えられ、結果、(5)を中心に小居住域をいくつか配した群構成の集落景観が想定される。ただしその生業を示す遺物は出土していないため性格への言及は難しい。一方(2)・(4)は他と比べて遺物が少なく、遺構の重複もほとんどないことから居住目的ではなかったかもしれない。(2)では人形の手とみられる土製品が出土しており(E-21)、これらが祭祀の場であった可能性も考慮しておきたい。

山麓・山間部の遺跡形態　このような中心的遺構群に約10～15m四方の小さな遺構群が付属する遺跡形態を、山麓部における古代末～中世集落の一モデルと考えると、今後、当該地域における遺跡の範囲を検討するうえで参考になると考える。トレンチ調査によって小さな遺構群に「当たる」確率はかなり低く、これらが遺跡範囲から除外される可能性が高いからである。対策としては、蓋然性の高い地点を中心に、近代以降に改変される以前の地形情報(古地図など)をもとに周辺小平場の検出が必要となる。しかし微地形の把握はたやすいことではないため、当該遺跡の試掘調査でもなされたように、地表面での遺物散布が一旦途切れた先で再び散布がみられる状況に対して注意をはらうことが重要である。

周辺遺跡の動向　次に、中世の茶臼山山麓における柿下遺跡の位置づけを検討しよう。茶臼山南麓にある茶臼山古墳群は、7世紀段階に古墳築造のできる集団が付近に集落を形成していたことを物語っている。川上地区公民館の南方で須恵器や灰釉陶器が採集される地点があり、古墳時代から古代の集落は、柿下遺跡よりもずっと下位の段丘縁辺に展開した可能性が考えられる。

そこからの連続性は不明であるが、平安時代末期になってより上位斜面への開発が進んだことは、前節で示したとおりである。柿下遺跡が面する川の谷奥部の状況については不明であるが、別の河川、例えば大宮川を遡った谷の最奥部

図34　柿下遺跡周辺の中世遺跡

に位置する新城市牛倉地区真国では、柿下遺跡と同時期の山茶碗や中世陶器が採集（註1）されており、この時期に谷奥部までを居住域とする開発が一気に進行したとみることもできる。各居住域は、前節で示したように100㎡足らずの小さなものがほとんどとみられ、それらの分布密度は不明であるものの、谷に面した斜面を切り開いて立地したと考えられる。柿下遺跡はそうした谷の入口付近に立地することから、谷奥部の小居住域群にとって拠点的な施設であった可能性もあろう。

一方、茶臼山東麓の北下遺跡東方のやや下った地点（註2）や大宮川を下った楠遺跡（新城市1999）では、平安時代～鎌倉時代の陶器や土師器皿が多数出土している。また八剣神社境内では、三巴文軒丸瓦と折り曲げ技法の軒平瓦が出土しており、平安時代末から鎌倉時代初め頃と考えられる（註3）。中世瓦出土遺跡は他に石座神社境内（註4）や柿下遺跡西方の旧白山社付近（註5）もあるが、柿下遺跡から南西約2kmの極楽寺跡出土瓦が平安時代後期と考えられている（岩山2010）。

このことから、当該期にこの地域の遺跡消長における質・量ともに1つのピークがあったことが指摘できる。つまり、平坦面から斜面までの広範囲にわたって、様々な開発行為が同時に展開していたと考えられるのである。そのさなかにあって、地域を見渡すことができる茶臼山山頂に造られた城山経塚は、まさにその記念碑だったのかもしれない。

中世荘園の遺跡　中世の当該地域には、荘園が設定されていたことが文献史料から知られている。すなわち設楽荘(建九3年(1196年)松尾社文書)、富永保(文明年間)、富永荘(康正2年(1456年)群書類聚段銭目録)である。遺跡南方の松尾神社は、平安京の松尾社が招来されたものと考えれば、当該地点に設楽荘の中心があったと考えられるし、富永も同様に柿下遺跡南方の現地名である。設楽荘と富永荘・富永保の連続性は不明であるものの、12～15世紀の荘園地名が同一地点にあることは、ひじょうに意義深いものと推察される。その施設や産物については、文献史料的には不明であるが、上記の考古学的情報を統合することで、荘園の景観や変遷の具体相の解明につながると期待される。柿下遺跡は中世荘園遺跡の一端であった可能性が高いのである。

中世から近世へ　最後に、中世の景観が近世へどのように受け継がれたのかみておこう。前節で遺構・遺物群(6)に関して述べたように、柿下遺跡の調査地点からすぐ南側には現集落があり、集落内では戦国時代～近世と思われる土師器鍋片が地表面で採集される。このことから現集落景観の基礎が、立地を少し低位に移して近世初頭にはほぼ出来上がっていたと考えられる。

明治17年(1884年)に作成された地籍図は、近世集落や耕地の景観を伝える重要な歴史資料である（註6）。それによると、柿下遺跡の調査地点は「山」であり、集落・水田・畑ではなかったことがわかる。ただその景観は現代の山林とは異なり、低木が疎らに茂る斜面が雁峰山系の頂上まで続いていたようである(註7)。また炭焼窯もいくつかあったとされる。このような「山」の景観が中世以降の開発の結果なのか、今後の研究課題である。

図 35　柿下遺跡付近の地籍図（トレースして再構成）

また、地籍図作成時期の土地利用は水田・畑にその主体が移っており、その区画は詳細に記されている。それによると、字柿下・安京では田一筆が比較的広く方形に近いものが多くみられる。中世荘園だった頃に耕地化したところであろうか。それと比較して字屋川付近の区画は不整形である。川の氾濫で幾度も線を引き直した結果なのかもしれない。そして字住居田（すまいだ）では谷を埋める棚田がある。「すまい」は「澄井」に通じ、水源形態を示しているとも考えられる。柿下遺跡の位置からすると、中世集落の人々によってこの棚田が開発されたと考えたくなるが、このような関係が他の遺跡でもみられるのか、今後注視していく必要があろう。

註1　民家の庭から出土した個人蔵資料を実見した。
註2　北下遺跡北東約100mの県道付近で出土した個人蔵資料を実見した。
註3『新城市誌』掲載の市教育委員会所蔵資料を実見。
註4『新城市誌』掲載の市教育委員会所蔵資料を実見し、境内で瓦が表採されることも実地で確認した。中世後半の可能性が高い。
註5『新城市誌』「寺山」から南方へ延びる尾根で瓦が出土したという（地元の方のご教示）。しかし一帯の耕地整理によって滅失し確認できない。
註6　愛知県公文書館で保管・公開している。
註7　川上地区の方のご教示。山頂近くで採取した枝や下草を縛り上げるなどした固まりを斜面にまかせて山麓まで転がすことができたという。一部では20世紀前半から植林をする「山」もあったようだが、大半の植林は20世紀後半になってからだという。

参考文献

岩山欣一　2010『極楽寺跡発掘調査報告書』新城市教育委員会

第２節　愛知県新城市柿下遺跡周辺出土の類石棒について

長田友也（南山大学非常勤講師）

類石棒について　縄文時代における代表的な儀器である石棒は、その形態が男性器に類似することより、女性像を模した土偶と対比され、古くから縄文時代の人々の精神文化を表す遺物として注目されてきた。一般に石棒と言えば、縄文時代中期に盛行し胴部最大径が10cmを超える大型石棒を指す場合が多いが、その定義・範囲は厳密に定められたものではない。筆者はこれら石棒に関連する儀器を総称して、便宜的に“石棒類”としている（図36）。

ここで提示する類石棒も、大きな意味では“石棒類”の中に含まれるものであるが、石棒が主として全面を敲打・研磨により成形したものであるのに対し、類石棒とするものは部分的にのみ敲打・研磨加工を行ったものを指す。したがってその形態は、素材となる自然礫の形状に大きく制約され、棒状であることはもちろんながら、頭部となりうる膨らみや、頭部を区別するための頸部の括れなど、石棒の形状を想定できるか否かが、素材獲得の上での重要な要素となる。これを突き詰めていけば、素材となる棒状礫自体にも石棒に通ずる観念的・象徴的要素を見出すことにもつながり、石柱や立石など自然棒状礫を儀礼的に用いる行為を理解する上でも、石棒と自然棒状礫の中間的位置づけである類石棒の評価は重要であると考えられる。

柿下遺跡周辺出土石棒　本資料は、柿下遺跡のある丘陵部の下に位置する新城市川上地区の川上公民館周辺において採集された資料である。花崗岩からなる棒状の自然礫を用いており、長さ24.4cm、幅5.9cm、厚さ5.6cmで、胴部径が5～6cm程度と片手で握れる程度の大きさである。頭部側がやや窄まるものの両端部は丸みを帯びた円礫であり、河床などで採集された転礫を素材としているものと考えられる。頭部側の部分に花崗岩中の石英・長石などの多い脈状の貫入があり、この部分が硬質であるためその周囲が削られやや膨らみをもち、あたかもこれを境に頭部を意識させる形状である。

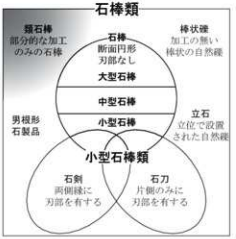


図36　石棒類の概念図

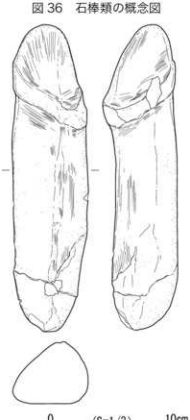
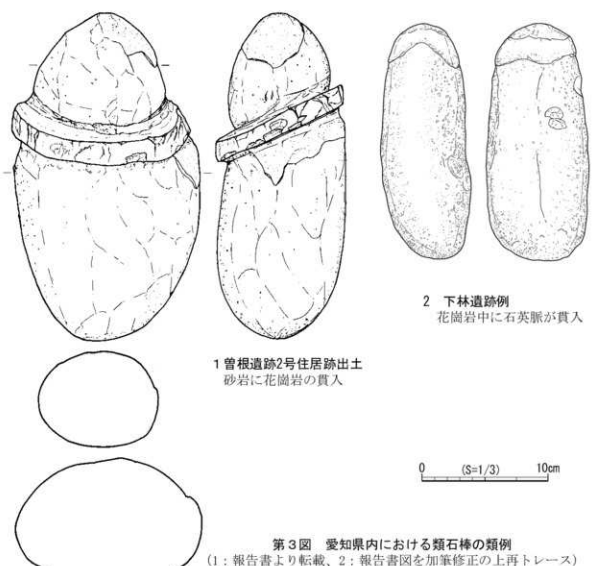


図37　柿下遺跡周辺出土の類石棒実測図

この頸部の膨らみ部分周辺にわずかに線状痕が確認され、本資料が研磨加工を施した石製品であることは明瞭である。研磨加工は、頭頂部付近、頸部ふくらみの上下、胴部の稜周辺にみられる。研磨加工の痕跡である線条痕の一部には、やや鋭い線状に残るものがあるため、本資料の加工が金属器を含めた硬質な素材による研磨の可能性も捨てきれない。しかし、線状痕の大半が砥石による鈍い研磨痕であり、加工が頸部膨らみの強調と、胴部稜の突出を軽減させるためのものであることから、棒状の形態製作を意図した製品として判断した。さらに、柿下遺跡を含め、川上地区内で縄文時代中期以降の土器が出土していることから、本資料を縄文時代の棒状石製品である石棒類と判断し、さらに加工の度合いから筆者が類石棒とする、部分的な加工を施したのみの石棒類とした。

愛知県内における類石棒の類例（図 38）　柿下遺跡例の時期比定はやや難しいが、形態的な特徴と周辺から出土する遺物より、縄文時代中期以降の類石棒であると考えられる。



第３図　愛知県内における類石棒の類例
（1：報告書より転載、2：報告書図を加筆修正の上再トレース）

図 38　愛知県内における類石棒の類例

本例のように、部分的な加工のみを施した類石棒としては、愛知県内において２例確認されている。１は、豊田市曽根遺跡 SB02 住居跡内より出土した長さ 25.8cm、幅 14.7cm の資料である。中期後半神明式新段階の住居跡の炉跡奥壁際に横たえた状態で出土しており、石棒使用の在り方を示す事例としても注目される。報告等では大型石棒とした（長田 2005・長田編 2009）が、柿下遺跡周辺出土例同様に砂岩に貫入した花崗岩部分を際立たせるため、加工はその周囲を中心に部分敲打・研磨加工がなされるのみであり、加工の度合いを大型石棒と類石棒の指標とするのであれば、部分的な加工に留まる類石棒に含まれよう。２は、丹羽郡扶桑町下林遺跡から出土した類石棒である（宮川 1981）。花崗岩の細長い円筒状の自然礫を用いており、長さ 18.7cm、幅 8.3cm、厚さ 7.0cm である。礫の頂点部分に長石を多く含む貫入部分があり、これを生かして頭部状に成形している。遺跡からは、縄文時代中期中葉～後半にかけての土器が出土しており、これらに伴う時期のものと考えられる。

これら２例と柿下遺跡周辺出土例を含め、いずれも花崗岩に伴う長石・石英分など白色の貫入を伴う自然礫を素材としている点で共通しており、他の２例が中期後半期のものと考えられることから、柿下遺跡周辺出土例も同時期に属する資料と考えられる。河川による水磨などで礫が丸みを帯びるにつれ、長石・石英分を多く含み硬質な部分が残り、頭部の境となる頸部の膨らみが自然転礫の状態で形作られたものと考えられる。すなわち自然転礫の状態で、すでにこれら類石棒のおおよその形状になっており、ほとんど加工することなく儀器として用いられたものと考えられる。したがって、この類石棒のあり方を積極的に評価すれば、石棒類に関する精神性は、作りこまれた明瞭な形状にあるのではなく、石製であり、男性器を印象付ける程度の形さえあれば十分であったと考えられる。すなわち、そうした形状をもつ自然礫に対してでさえ、石棒類と同義の精神性を表象していたことを示していよう。このように類石棒は、石棒類の精神性を考える上でも重要な資料であり、柿下遺跡周辺出土例についてもその一翼を担う貴重な資料であるといえよう。

謝辞

本稿を著すに際しては、愛知県埋蔵文化財センター、永井邦仁氏に資料見学から執筆の機会まで、大変お世話になりました。文末ながら記して深謝の意を表します。

文献

長田友也 2005「愛知県内出土の大型石棒－豊田市曽根遺跡出土の大型石棒を中心に－」『三河考古』第 18 号　1-20 頁　三河考古刊行会

長田友也編 2009『曽根遺跡』豊田市埋蔵文化財発掘調査報告書　第 37 集　豊田市教育委員会

宮川芳照 1981『下林遺跡』大口町文化財調査報告書　第３集　愛知県大口町教育委員会

遺構基本平面図
写真図版—遺構
—遺物

図 39　柿下遺跡基本遺構平面図割付図

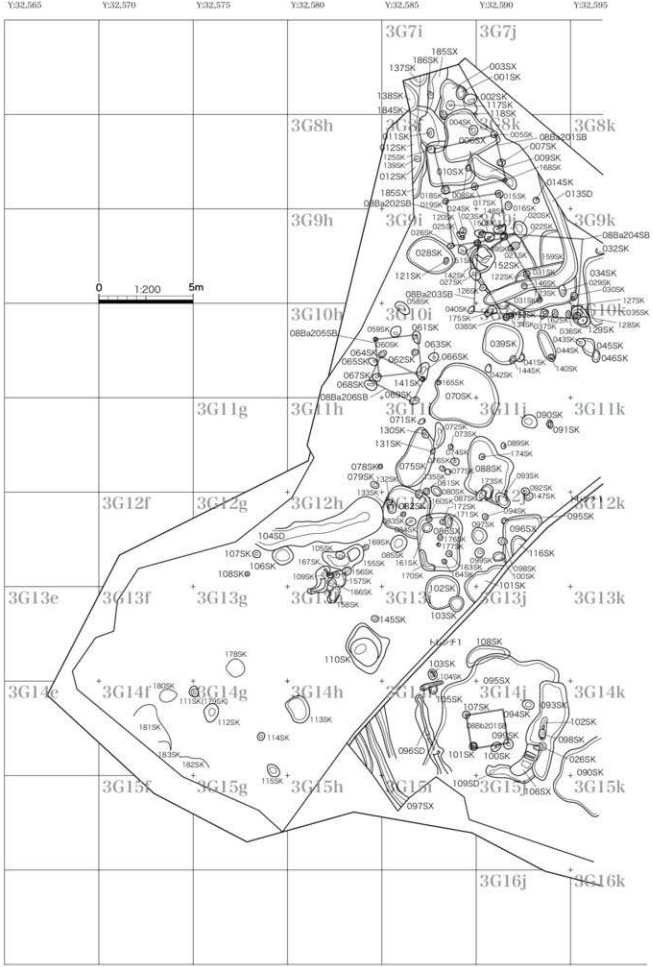


図 40　柿下遺跡 B 区基本遺構平面図（1）

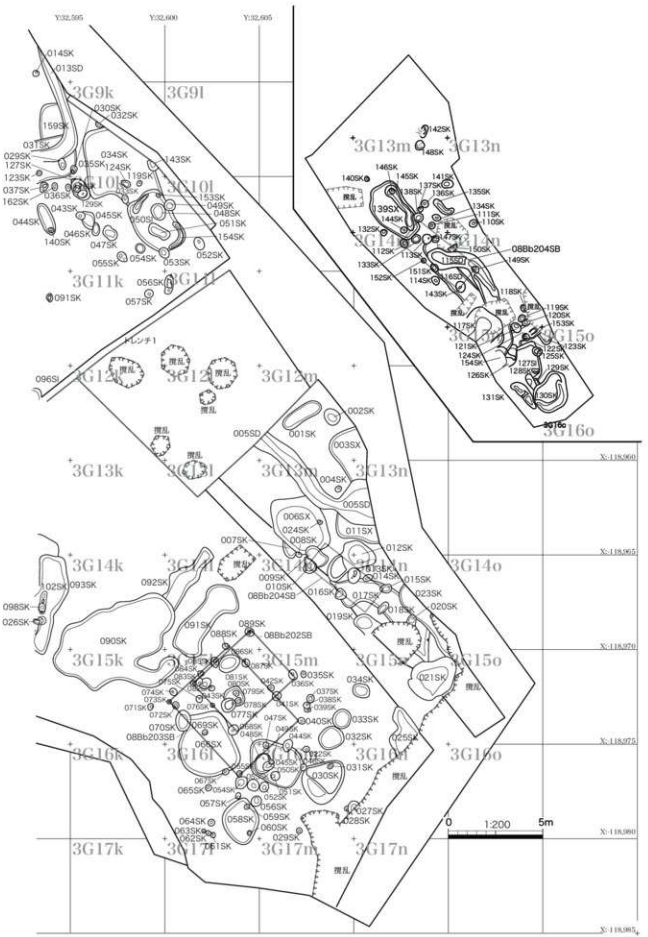


図 41　柿下遺跡Ｂ区基本遺構平面図（２）

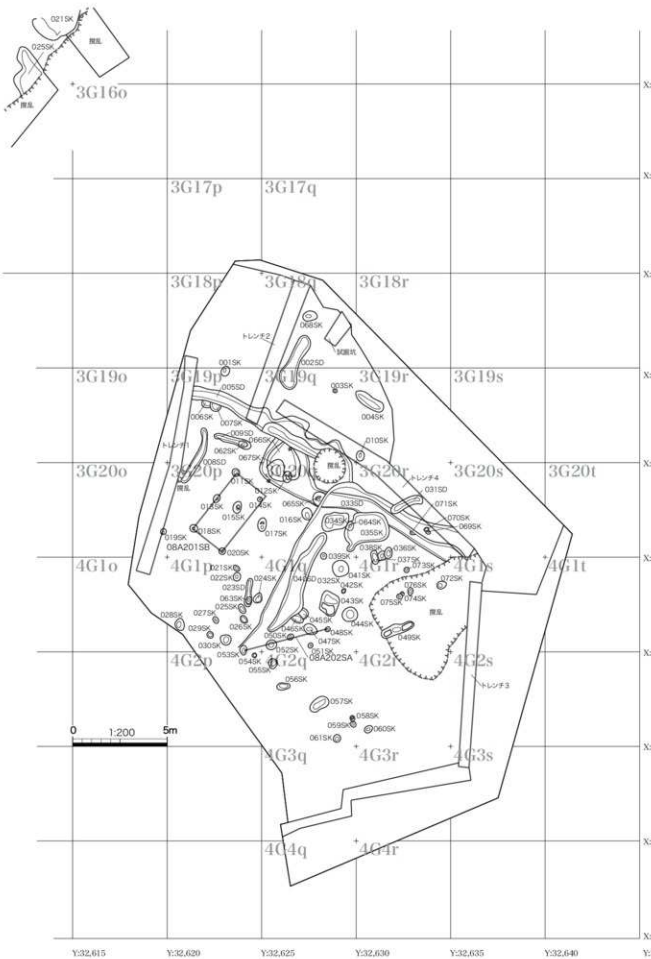


図 42　柿下遺跡 A 区基本遺構平面図

08A 区全景（検出）北から

08A 区全景　西から

写真図版 2

08A 区調査区西壁土層断面

08A 区平場 2 ベルト土層断面

08A 区土層北壁土層断面

08A 区東部検２検出　北から

写真図版 4

08Ba 区全景　南から

08Ba 区全景　北から

08Ba 区北部全景　東から

08Ba 区中部全景　東から

写真図版 6

08Ba 区北部全景（検出）東から

08Ba 区北西隅部全景（検出）東から

08Ba 区 006SX と 010SX　南西から

08Ba 区 006SX 土層断面　南から

08Ba 区 010SX 土層断面　南西から

08Ba 区調査区北西壁土層断面

08Ba 区調査区南部全景（検 2）南から

写真図版 8

08Ba 区 050SX 土層断面　南東から

08Ba 区 086SX　南から

08Bb 区全景　南から

08Bb 区全景　北東から

写真図版 10

08Bb 区全景　西から

08Bb 区全景（検 1 検出）北東から

08Bb 区平場 2 全景（検 2）南から

08Bb 区 006SX　西から

08Bb 区 139SX（006SX 下部検出）北西から

08Bb 区 139SX（006SX 下部）土層断面 南東から

08Bb 区 139SX（006SX 下部）

写真図版 12

08Bb 区 095SX 東から

08Bb 区 095SX 北から

08Bb 区 058SK（検出）北から

08Bb 区 096SD 土層断面

08Bb 区 088SK 上部山茶碗（E-69 検出）

08Bb 区 088SK 下部山茶碗（E-68 出土）

08Bb 区調査区西壁土層断面　北から

写真図版 14

36

35

37

36 墨書

38

41

46

47

57

58

62

64

68

82

87

68 墨書

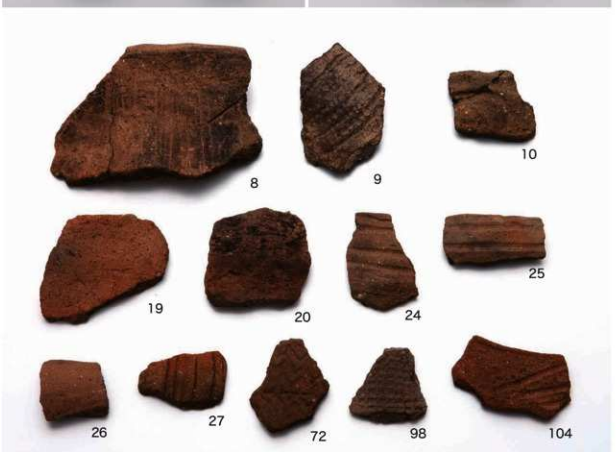
88

101

103

M1
2
3
11
12
14 内面
14 外面
15
15 内耳
7 内耳
5
22
23
21
32
33

写真図版 16



ふりがな	かきしたいせき
書　　名	柿下遺跡
副 書 名	
巻　　次	
シリーズ名	愛知県埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第176集
編著者名	永井邦仁、鬼頭剛、長田友也
編集機関	公益財団法人　愛知県教育・スポーツ振興財団　愛知県埋蔵文化財センター
所在地	〒498-0017 愛知県弥富市前ヶ須町野方802-24　TEL0567(67)4161
発行年月日	西暦 2012年 3月 31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積	調査原因
かきしたいせき 柿下遺跡	あいちけん しんしろし 愛知県新城市 うえの 上野	23207	760037	34度 55分 28秒	137度 30分 49秒	2008.12.01～ 2009.03.15	2,400㎡	第二東海自動車道建設工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
柿下遺跡	集落	縄文時代 ～ 江戸時代	掘立柱建物跡、竪穴状遺構、土坑等	土師器(皿・鍋)、瀬戸美濃窯産陶器、山茶碗、灰釉陶器、刀子、石鏃、石斧、縄文土器	中世前半に造成された小平場群

文書番号	発掘届出(20埋セ第72号・2008.10.7)　通知(20教生第1741号・2008.10.27) 終了届・保管証・発見届(20埋セ第121号・2009.3.19)　鑑定通知(21教生第316号・2009.4.10)

要約　本遺跡は、雁峰山系南東麓の茶臼山斜面に形成された、中世～近世の集落遺跡である。その開発は、平安時代末期に遡り、竪穴状遺構や掘立柱建物で構成される。その建物群は約10m四方の小さな範囲にまとまるものがほとんどである。出土遺物は山茶碗と土師器皿が大半を占め、一部灰釉陶器や戦国時代の陶器や土師器鍋がある。また時代は異なるが石鏃や磨製石斧、押型文土器などの縄文時代の遺物も出土していることから、時期の特定できる遺構はあまりないが当該期にも集落として利用されていたと考えられる。なお中世の開発は、荘園の所在を示す地名や神社が付近に存在することから、それに関連するものと考えられる。

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書　第 176 集

柿下遺跡

2012 年 3 月 31 日

編集・発行　公益財団法人　愛知県教育・
スポーツ振興財団
愛知県埋蔵文化財センター

印刷　サンメッセ株式会社